月刊ナイトバグ
自由投稿型リグルのスポポマガジン
NIGHTBUG
2009年 9月号
「ねえ、六角形って何？」
野球、サッカー、卓球、バレー…etc
秋先取り！ 給水とブルマを忘れずに
スポーツ特集

夏祭!!

月刊ナイトバグ　2009年9月号

Cover design　小崎

目次 (3p)

夏祭りぐる　戌亥 …… 2p

解けリグル　Jade. …… 4p～16p

月別テーマ「スポーツ特集」 …… 17p～50p　扉絵：てつ

- テーマイラスト …… 18p～26p
  (ADDA / 蛍光流動 / 亜人 / ニトリフ / 草加あおい / モ誠幹 / 豆板醤 / mimidori / 緑)
- 蟲の手帖　HOUSE …… 27p～30p
- 藍「ちょっとスッパいぞ」　羅外 …… 31p
- すぽぉつ着のスゝメ　斑 …… 32p～35p
- 100ドル札出せば舞台から遠くてもすぐ見つけてくれるでござるの巻　uchu-jin …… 36p
- パチュリグな日々～プロ野球編～　東 …… 37p～38p
- 上白沢卓球センター　怒羅悪 …… 39p～42p
- リグると！　ひどぅん …… 43p
- 紅軍鉢巻　秋水 …… 44p～46p
- 風祝の謀　くろと …… 47p～50p

無題　草加あおい …… 51p～52p

自由イラスト …… 53p～58p　扉絵：貴キ
(キッカ / 涼音 奏 / 第６珈琲 / 熾天使 / 草葉)

蟲の願事　～三話～　社 蛍夜 …… 59p～61p

リグルと収穫祭　MAL …… 62p～68p

介入者と使命、そして　夏樹 真 …… 69p～72p

漫画、自由作品、表1～表4　作者コメント …… 73p

編集後記 …… 74p

リグロスワード　mimidori …… 75p

解けリグル

著者：Jade.

リグルは、怒っていた。

己の体が頭頂部から溶け出させ、どろっとしたぬるま湯ぐらいの温度の液体と化して頭蓋骨の中に流入させ脳をふやかし、さらには額を伝って垂れ落ちつつ瞼をずりさげる眠気の戦線に対し、その怒りによって辛うじて意識を踏みとどまらせている事を、理解などしていなかったし、ましてや感謝などしているはずもなかった。

リグルには、それがわからぬ。

それとは、眼前にて白色の反射光を放つ活版印刷物の内容ではない。

虫と言っても彼女は妖怪である。文字ぐらい読めるし文章の理解もできる。

だが、そのような極局所的状況の理解が追いつかぬわけではない。

今自分が人間の里の寺子屋に居り、意味不明な文字と記号と図形の描かれている、外界よりもたらされたであろう上質紙と筆記用具が、意図不明のままに自らの眼前に、唯一の親切と言うには押しつけがましい程に手に取り易い位置に並べられている事。それらが自分に対し、いざ文意の理解と解答に臨まんとする事を、無言のままに強要している事が理解できぬのであった。

「……私は、スポーツをやる集まりがあるから来いと言われて連れてこられた覚えがある。」

半ば強制的にである。というより問答無用。というより反駁の隙を与えることなく。

先手必勝一撃必殺とはよく言ったものだ。普段特に考えもなく口癖レベルで使用する、小学校低学年級の四字熟語の意味を、これほど深く強く個性的かつ意味あるものとして理解できる瞬間というものは、そう滅多と巡り合えるものではない。

相手が思考を始める前に自分の行動に巻き込む事が、かくも相手を無抵抗にさせるとは。今度覚えていたら、自分の弾幕に応用してみよう。

「何を言う、これは頭脳スポーツといって、立派なスポーツだぜ。」

拉致実行犯は、悪びれずに両手を腰に当て、むしろ偉そうな態度で反証を行う。

「……論拠の提示を求める。」

リグルの左手に座った紅いリボンの宵闇妖怪が、やや下策ともとれる型どおりの反撃で抵抗を試みる。

しかし、ここ人間の里は人間の支配する場所だ。如何に幻想郷が人に対して妖が優位の世界と言っても、ここばかりではそういうわけにはいかない。

「外の世界では、世界中の猛者が一堂に会して腕を競う決闘大会である、『おりんぴっく』なるスポーツの祭典があってだな、その中に数学『おりんぴっく』なるものも存在する。立派にスポーツとして認められている証拠だ。」

人間は、外の世界の人間の文化を証言の論拠として提示してくる。

高圧的な態度に加え、具体的で信頼性の高い例示により構築された証言。
我々は、スポーツの集まりがある。という白黒人間の言葉に誘われて、もとい言葉とともに腕や胸倉をひっつかまれて拉致され、人間の里の此処へとやってきた。誘致のプロセスに若干の問題がある気もするが、それはここ幻想郷では日常茶飯事だ。
そして、我々は連れてこられたのち与えられた作業に対し、作業内容が事前の説明と異なる。として抗議を申し入れた。
その解答として、与えた作業は確かにスポーツである。よって事前の説明は作業内容を正しく説明していることが証明された。↑いまここ

「ねえ、ろっかっけいって何!?」
昆虫の身としては冷気は大の苦手だが、残暑厳しいこんな日には、天然クーラーとして役立つ氷精。
同席させられている人間の子どもと雑談していたらしい彼女が、目をきらっきらさせて教壇にあぐらをかく人間にきく。何故そんなにやる気があるんだろうか。六角形という概念も知らないくせに。
「あー、円周率が3の円の事だぜ。」
謎の説明をする白黒。リグルは虫だけに、六角形には人並み以上に自信があったが、氷精に理解させるのは面倒なので、二人のやりとりは無視することにした。
教室の机に座るのは、魔理沙がその辺で適

当にひっ捕まえてきた妖怪、左から、ルーミア、リグル、ミスティア、橙、チルノ。そしてその他、10名足らずだがの里の子どもたち。

　皆、同じようにして拉致してこられたのだろうか。その表情は、こぞって奥歯に悔しさを噛みつぶしているかのようにしわくちゃだ。今日は、人間たちにとってもたまの休日にあたる日曜日である。

　なお、妖怪が同席するのは、慧音も承知の事だ。

　教壇に、上白沢慧音……ではなくその霧雨魔理沙。教壇の、椅子ではなく机の上にあぐらをかいている所は彼女らしい。今にも、上白沢慧音が教室に見回りに来て、魔理沙をどやしつけてくれるのを、教室中が期待していた。未成年者略取。訴えてやる。

　全部終わったら、お前たちの為に私が楽しい宴会を開いてやるから有りがたく思え。という魔理沙の甘言にのった私たちが⑨だった。そう、5人の妖怪は自責していた。

『全部終わったら＝全問正解者が出たら』

　こういう規定を説明されたのも、彼女の魔法で教室に封がされてからの事なのである。

　幸い、このアウシュビッツ閉鎖空間も、氷精のおかげで暑さはいくらか快適だ。

　力で魔理沙に勝てる気はしない。制空権は未だに敵の手にある。連合軍の救助には期待できない。私たちが、自分の力で、この死の収容所から脱出するしかないのだ。泣き言は言っていられない。

「やれやれ……。」だれともないため息が教室に生まれては消え、みなしぶしぶと問題に取り掛かるのであった。

　まず、リグルの視界に飛び込んできた文章は以下の通りであった。

(1)　1○23○4○5○67○8○9＝100　○内に＋か－を入れ、左式を満たせるか。（5点）

いきなりなめてかかったような文章がおどる。

だが、こんなのはありがちな問題だ。正攻法で行けば、まずは全て＋にした場合の和を考え、そこから微調整をするタイプのパズルだろう。

　この式で注目すべきは23と67だ。全て＋にするとこの式は117になる。つまり、100を超えた分の17より大きいこの二桁の数の頭に、－はありえない。

　とりあえず二つを足して90とし、残りを微調整で何とかするはずだ。

　だがまってくれ、1，4，5，8，9を加減法だけで17になんて可能なのだろうか？

少女計算中……

1○23○4○5○67○8○9＝100　を満たすように○内に＋，－を入れて左式を完成させよ。

まず、23＋67＝90なので、

$90 + a + b + c + d + e = 117$（a，b，c，d，eは、それぞれ1，4，5，8，9のいずれか）

とおく。

90を移項して、

$a + b + c + d + e = 27$

だ。記号を＋から－に変えることで、右辺の値を27から10にしたい。

たとえば

$a + b - c + d - e = 10$

のような形だ。

さて、ここでeの符号を＋から－に変えることを考える。

この操作は、右左両辺に-2eを足す事である。

$a + b + c + d + e - 2e = 27 - 2e$

$a + b + c + d - e = 27 - 2e$

他のa，b，c，dの符号を＋から－に変えることについても同様である。

たとえば、すべての符号を－に変えると、

$-a-b-c-d-e=27-2(a+b+c+d+e)$

となる。

∴左辺のあるいくつかの数の符号を変えた時、右辺を$27-x$とおくと、xは必ず二の倍数である。

27と10の差は17であるので、$27-x=10$を満たすには$x=17$でなくてはならない。

しかし、xは2の倍数であり、また17の素因数に2は含まれないので、$x=17$が満たされる事はない。

∴与式は満たされない。Q.E.D.……？

示されてねえよ題意。

「霧雨魔理沙！」

「世の中で解けと言われる出題には、解けない問題の方が多いぜ。正攻法で私の弾幕を抜けられるとでも思ったのか？」

リグルとほぼ同時に問題の解を導いた、橙との同時の抗議に、間髪いれず返す刀の魔理沙。

全てを予想し用意されていたであろう反論に、ぐうの音も出ない。

問題文は、『左式を満たせるか』。答えは、『満たせない』だ。正答が存在するという前提と、対抗意識の煽り。私たちの心理を二重についたトラップ。第１問からこれでは……ここからも、問いの難易度以外にも用心しなければならぬようだ。うぎぎ、必ずかの邪知暴虐の魔女を除かねば……そう、決意も新たに次の問いを見る。

(2)以下の魔法陣を解け。（魔法陣を解くとは、大きな正方形を９の小さな正方形に区切ったマス目について、縦横斜３マスに入るそれぞれ異なる整数の和が、それぞれ全て等しくなるような数字を入れることである。）

あれ……？　正攻法じゃね？

「うふふ、藍様の式が付いている私に、数字の問題をぶつけるとはねぇ。」

二つ隣で、踊る様に鉛筆が滑り、跳ねる音が聞こえる。魔理沙の微かな舌打ちは、静かな教室に大きく響いた。

そんな折、教室の戸をたたく音。

「魔理沙、来客だぞ？　ちょっと長くなりそうだが……」

この声は、本来の教室の主、上白沢慧音の物だ。彼女は、子どもたちに数学の稽古をつけてやるという、間違っているのか正しいのか今実際にレクチャーを受けている当事者にも判断つかない言葉に、上機嫌で教室を提供してくれたそうだ。

「おう、せいぜい期待してるぜ猫又。じゃ、私はしばらく慧音達としゃべってくるぜ。」

そう言って、魔理沙は部屋を後にする。そんな出来事も、橙は意に介する様子もなく問題を解き続けているようだった。流石、妖怪の賢者の式の式。

リグルも多少は数学に自信があった。負けてはならじとばかりに、急ぎ第１問に挑むのであった。

――――――――――――

……止まった。

リグルがようやく魔法陣第３問に取り掛かろうとしたその時、軽快だった二つ隣の鉛筆の音が、止まった。

ちらと見ると、猫は眉間にしわを寄せ、玉の汗を浮かべながらじっと問題を睨みつけている。

何事か難問かと思い、リグルは自分の解いている問題のずっと下、問題用紙左半分下部へと視線を滑らせる。

そこには、こうあった。

『(3)以下の魔法陣を解け。魔法陣を解くとは、大きな正方形を16の小さな正方形に区切ったます目について、縦横斜４マスに入る数字の和が以下省略』

さらにその下を見ると……

『(4)以下の魔法陣を解け。魔法陣を解くとは、大きな正方形を25の小さな正方形に区切ったます目について、縦横斜５マスに……』

ガタンッと、リグルは席を立った。

唸っていた橙、両隣のミスティア、ルーミア、後ろの席の子どもたちは、静寂がのしか

かっていた教室で突然の異変に、何事かとリグルを見た。氷精は、机に顔を突っ伏して白煙を吹いていた。

「みんな、力を合わせよう。」

リグルは、教室を見まわし、全員の注目が自分に有る事を確認してから喋りだした。氷精は無視した。

「みんな、この問題はむずかしい。流石に、論理体系や式を扱う魔法使いを、人間だてらに名乗るだけの事はある。正直言って、このパズルを誰かが、日暮れまでに、しかも全問正答する事は不可能だと思う。」

ドンッ！　っと、周囲を驚かさぬ程度に加減して、軽く机を叩いて、リグルは続けた。

「だが、私たちの勝利条件。魔理沙に祭を開かせるには、『誰か一人でも全問正解者が出ればいい』。この条件から導かれる私たちの行動は一つだ。即ち、『ここにいる全員が力を合わせ、一人の解答用紙を完璧に完成させる』事ッ！！！」

ダンッ！　っと、今度は先ほどより強く机を鳴らす。

先ほどは、より自分の話に注目させるためにそうした。今度は、全員の団結と士気を高めるためだ。

既に室内の全員が、彼女を見上げて演説に聴き入っている。

リグルは昆虫と言っても蛍であるが、妖怪である。

力弱き多くを束ね、一つにして動かすことについては人間より高い完成度を誇る、膜翅目社会性昆虫の力をも備えているのだ。ついでに、チョウ目やハチ目といった呼称も認めてはいない。

「力を合わせよう。全員の力で、立ち向かおう。我々をこの地獄へと放り込んだ魔理沙は、我々の敗北を望んでいる。しかし、我々は勝利しこの地獄から這い上がる事を望んでいる。彼女がそうならない事を望む以上にだ。彼女は見くびった。私たちを。それは、正しい事かもしれない。私たちの力が、彼女に及ばないのは事実だからだ。しかし、私たちの想い。勝ちたいという望みの強さは、はるかに彼女を凌駕している。そこを、彼女は見誤った。力のみで物事を図り、生きるものの何より大切なものを蔑ろにしたのだ。ならば、私たちが教えてやろうじゃないか。蟻が魔法使いを倒すこともあるという事を。暴力を持って私たちを捕縛し、理不尽にこの地獄に突き落とした魔理沙に、私たちが義によって立ち向かい、不屈の精神によって、魔女の奸佞邪智を打ち破る意志がある事を。そしてその意志こそ、何物にも負けない最高の魔法である事を！！！」

（オォ～～～～～！！！）

リグルは、小さくとも女王なのだ。その資質が、今こそ蛹より羽化する。

その演説に、拍手喝采をする者。万歳を三唱する者。威勢よく拳を突き上げ鬨の声を張り上げる者。途中で起きた氷精など、涙か汗か結露かよくわからぬ液を、瞳に浮かべている。

「やろうよリグル、魔理沙の鼻を明かしてやろう！」

「私も、早くヤツメウナギの仕込みに戻るために！」

「あたいも、やるよ！　なんたって、さいきょーだし！」

「数字なら、私に任せてよ！」

「私たちも、頑張ります！」

「今こそ、慧音先生の教えを活かす時！」

「解けたら、僕今年は蚊殺さないし、蚊取線香も焚きません！」

いや、そこまでせんでもええけども。

そう思いながら、リグルは確信していた。

この戦、勝てると……。

まずは、現在最も解答の進んでいる橙の答案をベースにすることで、一同合意した。

既に、４×４マス魔法陣まで全問解き終わっている彼女の答案をいくつか書きうつし、それぞれ分かれて向かう。机のスペースが全員が一つの紙に向かうには狭いからだ。

５×５マス魔法陣は難解だった。第１問から、埋められているマス目が少なく、何から考えていいのかもわからないような状態だ。妖怪５人の中で最も数字に強い鬼神憑きの橙すら、ペンを止めざるを得ないのも頷ける。

これは、そもそも解けるのだろうか。難問に向かう数多の凡人の例にもれず、そんな敗者の身勝手かつ自己擁護的な懐疑が、皆の心に首をもたげてくる。
リグルの、高揚感のみから来る無根拠な自信は、早くも瓦解せしめられた。
だが、その分リグル以下一同は冷静さを取り戻してもいた。
流石の魔理沙も解けない問題は出すまい。最初の問題のように、何か罠か、もしくは解法が何かあるはずなのだ。
うんうん唸る、先ほど人数を確認した（彼女らは、7より多い数を一目で数えられなかった。）人間の子ども全8名と妖怪5名を合わせた13名。
下手の考え休むに似たり。
その中で、やはり橙が何やら意味の持った思考を展開しているようである。きょろきょろと猫目を紙上に這わせ、頭の中で何らかの操作を行っているようである。
「……あのさ、」
先に口を開いたのは、その橙ではなくリグルであった。
「この魔法陣、小さい数字のある場所が全部同じじゃない？」
リグルは、3×3の魔法陣について最も小さい数字は全て、左列の二番目に位置している事に気がついた。
「でさ、2番目に小さい数字はここにあるんじゃないかな……？」
そして2番目に小さい数字は、右列の3行目にある事を指摘した。
「これさ……何か法則があるんじゃないかな……？」
「待って、これだけいちばん小さい数字は右の真ん中だよ？」
人間の少年が、例外を指摘する。
「……いや、この問題、右列を軸に鏡合わせにしてごらん、ひっくり返しただけで、やっぱり位置どりは同じだよ！」
リグルは、その例外がやはり自分の発見した法則に当てはまる事を看破する。
「三番目の数字は何処？」
「うん、必ず、真ん中の列の一番上に来てる。その次は……その右隣だ。で、次はその左下……次もその左下……数字の大きさの並び方が、全部同じ配置になってるよ！」
リグルは思わず声を上げた。ついに、突破口を見つけたかもしれないのだ。
「……これ、等差数列だよ。」
橙が、その3×3の魔法陣群を見つめながらつぶやいた。
「とうさすうれつ？」
復唱した人間の少女以下、他の人妖全員が一斉に橙の顔を覗き込む。
「同じ差がある数の列だよ。たとえば一番目の魔法陣。いちばん小さい数字から順に並べると、3，7，11，15，19，23，27，31，35だよね。全部左の数字に4を足した数字になってるんだよ。みんな差が同じ4の数の列でしょ？　だから、等差数列っていうの。って、藍様が言ってた。で、その並び方はどうなってるだろう……」
「右肩から左下へ行く線は、必ず真ん中ぐらいの三つが順番に通ってるよ！」
「それで、左端の左下は一番右、一番下の下は一番上って考えるんじゃないかな？」
「もう数字が入ってる所にぶつかったら、その場から右に一個ずれるのかー。」
「そうだ、必ずその順番で、等差数列が並んでるよ！　やった、法則性を見つけたよ！」
橙とリグルがハイタッチ。教室がどっ、と沸く。
「ありがとリグル、みんな。じゃあ、これをこの5×5の魔法陣にも当てはめてみようか。確かに、左列の3行にそれっぽい数字が並んでるよ！」
「じゃあ、左の真ん中の次は、右の4番目か。その次が、右から2つ目の上から5番目。」
「その次が3列1行、そこに19が入ってるね。左から1列3行の最初の数字が10だから、19－10＝9これを10から三つ進んだのが19だから3で割って、間の数字は三つづつ増えてれば計算が合うよ！」
リグルと橙の作業を、他の面子は拳を握りしめ、固唾をのんで見守っている。
「その左下が22、その左下は10にぶつかるから22の右隣に25、28、31、その下は5列

の一番下……やった、問題に34って書いてある！　合ってるよ！！」
「あと問題文に書いてあるのは、右の真ん中の82か。前の9マスだとここが終点だったよね。82－10を3で割ったら……24。やっぱり、25マスだからこれが終点だよ。」
「そうだね、書き終わったよリグル。それぞれの列の合計は全て230！　出来たーーーー！！！」
　わっと歓声が上がる。もう、外に聞こえようがどうしようがお構いなしだ。人妖入り乱れて、全員が嬉しさを爆発させる。
　この後の問題は、もう楽勝のはずだ。
　さあ、魔法陣以外の問題に向けて、チルノの冷気で、英気を養おう。
　彼女、さっきから目をきらっきらさせて、見てるだけだったから。

――――――――――――

　リグル率いる一行は、解答用紙左半分を埋める魔法陣地帯を突破していた。
　最後の９×９マスの何も数字が入っていない広大な格子の敷地に、任意の数字を埋めて魔法陣を作れという問題にも、もはやだれ一人ひるむ者はいなかった。ただ淡々と、鉛筆を持つのに疲れた橙の代わりにリグルが、書き損じの無いように定規を当てつつ、慎重にマス目を埋めて行っただけだ。
　リグルは先述の六角形や、こういった格子状の図形に強いのである。社会性を持つ蜂の巣の形状を見れば理解できるであろうことは先述した。
　思わぬ程の完全勝利に意気上がる一行。
　魔法使い何するものぞ！
　その勢い既に破竹といった塩梅で、問題用紙の右上に目を移した。そこには、シンプルに、こう書いてあった。
『(5)円周率は、３．０５より大きい事を証明せよ。（25点）』
「……円周率って何？」
　ルーミアの率直な疑問。
　一瞬、一同静まり返る。
「ちょっとまってね、確か、あれだよ。丸の周りの長さとか広さを求めるのに使う数の事だよ。って、藍様が言ってた。確か、３．１４１５９……って感じの数だったと思う。」
　またしても、橙に助けられる。
「そうだ、この前僕達も慧音先生に習ったよ！」
　リグルもまた、思いだしてきた。そのあたりの事を、どこかで勉強した覚えがある。
「じゃあ、もう終りじゃん！　３．１４１５なんとかって、３．０５より大きいよね、あたいわかるよ！」
　チルノ、本日初めて数字を含んだ発言。
「でも、証明せよ。だよね……円周率って、なんで３．１４なの……？」
　人間の少年の一言に、またも一同は静まり返る。
　腕組みをして顔を伏せ、目をつぶって眉間にしわを寄せ、片眉を吊り上げて『う～～ん』と唸るばかり。
　今回は、先ほどの魔法陣よりひどい。なにせ、ヒントも何もない。
　橙も先ほどの疑問、なぜ円周率は３．１４なのかという問いに答えられなかった所を見ると、おそらく、円周率というのはそうだと『決まっている』数字なのだ。
　そうだと教えられ、そうだと信じ込んで何気なく使っている数字なのだろう。
　我々は普段の生活を、余りにも他人に依存し過ぎたのかもしれない。
　先人が見出した有用な概念や真理を、そうだと教えられた形のままただ信じ、自分で面倒な思考の旅を巡る事を放棄した。
　人間は、限られた寿命の中で様々な技術に特化した専門家を生み出し、通貨をつかってその力を借りるというシステムを作った。
　便利だ。
　だが便利さとは、自分の中を巡り旅し、自分を育てる機会を放棄させる事でもあった。便利さを当たり前と信じ、その喪失を想定もせず、対価を払えば手に入って当たり前の物と、傲慢にその上に居座っている。
　結果、喪失した時には回復不可能だろう。
　自分の物ではない物を使っていたのだか

ら、何も知らない、出来るはずもない。
　今、一同はまさにそれに直面していた。
円周率はなぜ３．１４なのか。胡坐を描いていたその既成事実を破壊され、自らの手で、それを組み立てなおさなくてはいけない。
　誰もが、深い絶望に飲まれかけたその時、
「それでも、やるしかないんだよ。」
悲愴な決意で、やはり最初にリグルが立ち上がる。
　女王の責任感か、プライドか。
　これほどの難敵の前にも、膝を折る事を彼女はよしとしない。
「少しだけでもヒントを纏めよう。橙、八雲藍さんは、円周率をどんな時に使ってたの？」
「あーー！！」
　突然の氷精の叫び声で、今まさに言葉を発さんとしていた橙にあった注目は、瞬時チルノに向かう。
「なんだよ！興奮しすぎだよ。冷気ぶっ飛んできてるよ。寒いよ。」
　集中力を殺がれたリグルが、これでもかと文句をぶつける。
「あたい、円周率って知ってる。ほら、問題解き始める前に、白黒が言ってた！」
　リグルは、はっとして魔理沙のセリフを回想した。
　『ねえ、六角形って何!？』『円周率が３の円の事だぜ』
「あーー！！」
　続いてリグルも叫んだ。
　これは、絶対に大きなヒントだ。
「で、藍さんはなんて？」
「え～と……丸……円の周りの長さは、円の中心を通る、円の中に引けるいちばん長い直線である直径×円周率。円の広さは、円の半径×半径×円周率……って言ってた思う。」
　リグルは、このチルノの回想と橙の円周率の使い方をとりあえず紙にメモし、そこを足がかりに証明を試みることにした。
　六角形の周りの長さを考えた。多角形はリグルの得意技だ。
　まず、正六角形を考え、その周辺の長さを考える。
　正六角形に対角線を描き加えると、６個の正三角形が出来上がる。対角線は、正三角形の辺２本分の長さだ。六角形の周りの長さは、正三角形６個分なので、対角線×３が周りの長さである。
「やっぱり……」
　丸……円の周りの長さは直径×円周率。これを、正六角形の内側に引ける中心をとおるいちばん長い線、対角線×３に当てはめて考えると、円の周りの長さと、その中にぴったり入る正六角形の周り長さを考えたらわかる。正六角形の対角線はそのまま円の直径だから、対角線×３＜対角線×円周率。即ち、円周率＞３は明らかだ。なるほど、確かに六角形は円周率３の円なわけだ。
　おお～と、周囲から感嘆と賛辞が聞こえる。ここまでは、人間たちの最年少、12歳の少年少女にもわかる問題だ。
　問題はここからである。題意は、３．００ではなく３．０５より大きい事を示せとある。
「橙、三平方の定理ってわかる？」
「それならわかるよ、内角に直角を含む三角形の周りの長さの問題で、いちばん長い辺×いちばん長い辺＝短い辺×短い辺＋もうひとつの短い辺×もう一つの短い辺。って藍様が言ってた。あ、あと、同じ物を２回掛け算する事をって言って、２乗される前の数の事を√っていうんだって。」
　人間の中にも、わかるわかると囃す者がいた。14歳の二人だった。
「じゃあ、それをつかってちょっと考えてみよう。」
　そう言ってリグルは、里の子どもからコンパスを借り、解答用紙に大きな円を一つ描いた。そして直径の線を書き入れ、分度器を使って60度の線を円の中心からのばし、きれいに内接する正六角形。正確には、正三角形を六つ描いた。そしてさらに、分度器を使って30度を測り、正六角形と六つの頂点を共有する、正12角形とその対角線を描いた。
「じゃあ、いくよ。正六角形を６等分するこの正三角形の辺を１とする。その正三角形の一つに注目すると、正12角形の対角線

は、正三角形の辺の一つを1：1で2分割するように貫いているよね。まず、この貫いている対角線の長さのうち、この貫かれた辺と交わっている点から円の中心までの長さを求めよう。その長さを仮にaとすると、この対角線と、貫かれている辺のなす角は直角だから、三平方の定理が成り立つよね。いちばん長い辺が1。残りの一つは1÷2だ。1×1ー1/2×1/2＝a×aだよね。そうすると、この三角形から飛び出してる部分、三角形の辺と交わった点から円に交わる点までの短い棒だね。これの長さは、a×a＝1ー（1ー1/4）＝3/4。aは3/4が二乗される前の値だから、√3／√4……でいいんだよね？　橙。」

「うん。あ、ににんがし。2×2＝4だから、√4は2だよ。」

九九の話題に、知ってる知ってると、口々に里の子どもたちも囃したてる。

リグルも、静かに頷き返して次に進む。

「ありがとう。これで、aの長さは分かったよね。で、貫いている対角線の長さが1だから、1ー√3/2が、その短い線の長さだ。じゃあこの線と、さっきの正三角形の辺の半分の線と、正十二角形の辺とでも直角三角形が出来てるよね。じゃあ、正十二角形の辺の一本が、三平方の定理でわかるんじゃないかな。」

「そっか、計算なら屋台の勘定で慣れてるよ。その辺の長さをxとすれば、（1ー√3/2）×（1ー√3/2）＋1/2×1/2＝xの二乗だね。えっと、＝xの二乗だから、計算するとえーっと、1ー2×√3÷2＋3/4＋1/4＝xの二乗か。で、2ー√3か。これが、xの二乗だよね。で、12倍のxを求めたいんだから、12倍のxの二乗は144×xの二乗は、288ー144×√3かー。」

ここまで出番のなかったミスティアが、ようやく訪れた得意分野に能力を発揮する。

「√3は、確か藍様が、人並みに奢れや……1．7320508って言ってたから、288ー144×1．7320508＝38．584めんどくさい68848だね。で、√38．58468848が、やった！正十二角形の周りの長さだよ。」

「で、円周率が3．05だとして円周を計算すると、3．05×（1＋1）だから、6．10だね。6．10の二乗は……37．21．やった、38．58より小さいよ！！正十二角形の周りの長さは円の長さより短いから正十二角形の周りの長さが√38．58なら、円周率3．05で計算した円の周りの値の方が小さくなっちゃうって事は、3．05は円周率より小さいんだよ。できたーーー！！！」

「ちなみに、3．14で計算すると円の周りは√39．4384になるね。ちゃんと、12角形の周りの長さより長くなってる。やったーー！！　できたできたーー！！！」

「あたい、はじめて役に立ったよーーー！！」

教室内は歓喜の輪だ。みんなハイタッチ、ハイタッチ、ついには人妖輪になって踊り出す始末だ。

そんな騒ぎに、外の連中が気付かないわけがなかった。

「おいおい何の騒ぎだぜ？」

「「「「「げぇ、魔理沙！？」」」」」

等しく、その場の全員が凍りついた。

「なんだぜその孔明でも見たような顔は。お、おいおい……あの問題解いちまったのかよお前ら……」

「おお橙、こんな問題を解けたのか、頑張ってるみたいだな。私は嬉しいぞ～。」

「ら、藍様！どうして……」

「うん、お前達が魔理沙の主宰で頭脳スポーツやってると聴いてな。魔理沙と慧音さんと色々話してたんだよ。」

「ほう、なんだ、ずいぶん難しい問題をやってるな……え、これが解けたって？？」

慧音は、いましがた解けたという問題文を読んで、目を白黒させている。なにせ、目の前に居るのは12～14の少年に、頭のよくなさそうな5人のちびっこ妖怪である。

「ちょーっと証明は荒いがな、数字的には解けてるぜ。三角関数も知らずに、よくやるもんだよ。なるほど、面積の近似じゃなくて円周でやってるのか。こっちの方がエレガントかもなぁ。よもや、お前達に教えられるとは思わなかったぜ。」

「ま、魔理沙……？」

「あー？なんだよその顔は。別に、誰も他人と相談しちゃいけないなんて言ってないぜ？ほら、最後の問題。きっちり答えてみ

ろよ。」

「「「「「は、はーーーーい！！！」」」」」

安堵の表情、そして喜色満面の笑みを浮かべ、霧雨魔理沙の優秀な生徒たちは、最後の問題に向かう。

「？？なーにこれー。『二つの正三角形を分割し、一つの正三角形にせよ。ただし、できるだけパーツは少ないとうれしいぜ。』だって。」

「言葉通りだぜ？」

「正三角形をばらして、一つの正三角形にすればいいんだよね？」

フフン、と得意げに鼻を鳴らす橙。

「ほぅ、自信ありそうじゃないか。もう答えが出たのか？」

「ンフフ、正三角形の2辺の中点を通る線は、もう一辺に平行だよね？で、その線を引いた二つの中点から、もうひとつの辺の中点に線を引く。そうすると、一つの正三角形は四つの正三角形に分割できるよね。その操作を、分割後の4つの正三角形にも行う。その操作を無限に繰り返していったら、三角形は滅茶苦茶ちっちゃく粉々になるよね。それを組み合わせたら、一つの正三角形になるはずだよ！」

「……いいか、お前に面白い話をしてやろう。チルノが、いつものようなアホ面で湖面を飛んでいるのを射命丸文が見つけた。射命丸はネタに困っており、何か記事をでっち上げようと、チルノを追いかけて全速で飛び始めた。彼女はあっという間に今までチルノが居た地点に到達したが、それまでかかった時間の間に、チルノは前に進んでいる。また、射命丸はチルノのいる地点に移動を続けるが、その地点にたどり着くまでにかかった時間の間に、またチルノは少し先の地点に移動している。またその地点にってな感じで移動を続けても、射命丸は永久にチルノを追い越し呼びとめて話を聞く事は出来ないわけだ。おまえの言ってるのはそういう事だよ。線を無限に分割する事は出来ないんだぜ。大体、原子まで粉砕して組み直すパズルなんてエレガントだと思うか？そんなもんは閉じるムーンライトレイだ。ガチ判定の正直者の死だ。もう少し出題者の気持ちも考えてほしいぜ。」

完全論破にフルボッコの駄目だしを受け、しなびたレタスのようにしゅんとしてしまう橙。

「だいじょうぶだよ橙。ここまでやってきたんじゃないか。お前達なら、必ずできる。」

「藍様……。」

「よし、最後の大掃除だ。これが出来たら、魔理沙とお祭りだよ！時間も残りわずか。サクッと終わらせよう！！」

女王リグルの気合いに、一同再び団結し問題用紙に向かう。

あらぬ方向を向いて口笛を吹くお祭の主催者も、もはや彼女らの視界にはない。

リグルは、先ほどの魔理沙の言葉を考えていた。

『出題者の気持ちも考えてほしいぜ。』

問題は、なぜ存在するのだろうか。

問題と言うものの存在意義を考えた時、それは、その問いに取り組み解を導こうとする解答者の存在が不可欠である事に、リグルは気付いた。

一定の法則に従えば、一見不可能に近い5×5の問題も簡単に解けた魔法陣の問題。出鼻をくじく解答不能の第一問。全て、私たちが解く努力を続け、解いたからこそ意味の生まれた存在だ。

思うに、魔理沙はこの問題を解けぬように工夫をしつつ、本当は解いてもらいたいと思いながら作ったのではないだろうか。

事実、自信作だったであろう円周率の問題を、見下してさえいた私たちに打ち破られた。にもかかわらず、魔理沙は悔しそうな顔一つ見せずに解答の写しに見入って、あれこれ書き加えたりぶつぶつ文句を呟いたりしている。

解けるわけない。出来るもんならやってみろ。そういう挑戦的な意識の中に、どこかその戦いを楽しみたい、私たちに解いてほしい。解く努力をしてほしい。解けると信じている。信じて、待ってくれている。

そんな魔理沙の気持ちが、群れず他者を思うことの少ない妖怪たちの中でも、無数の虫たちを束ねるリグルは、わずかばかり理解できた。

魔理沙は、私たちを信じているのだと。
窓の外では、斜陽は赤い光を樹々の葉に投じ、葉も枝も燃えるばかりに輝いている。日没までには、まだ間がある。私を、待っている人があるのだ。
疑い99％でかかりながら、静かに期待してくれている人があるのだ。私達は、信じられている。
途中、幾度かあきらめそうになった事もあった。それは夢だ。悪い夢だ。忘れてしまえ。
私たちは弱い。世間の殆どの者は弱い。弱い物は、ふいとあんな悪い夢を見るものだ。リグル、お前の恥ではない。再びペンを握り、考えられるようになったではないか。
これは、確かに戦いであり、勝負であった。出題者というライバルとの、そして自分との勝負だった。心身とも疲労困憊。間違いなくスポーツの祭典だと、リグルは理解した。
私は、信頼に報いなければならぬ。いまはただその一事だ。解け！リグル！
解答用紙の、最後の空白が見える。
純白の紙は、夕陽を受けてきらきら光っている。
まだ陽は沈まぬ。最後の死力を尽して、リグル達は三角形を描いた。
彼女達の脳はからっぽだ。ブドウ糖の1滴すらも存在しない。
ただ、わけのわからぬ大きな力に押されて考えた。
陽はゆらゆら地平線に没し、まさに最後の一片の残光も消えようとした時、図形に強かったリグルが、疾風の如く三角形の断片を並べ直した。
……出来た。

夜。
宴席で、子どもたちはしぼりたての林檎ジュース。妖怪たちは当然アルコールを手にはしゃぎまわっていた。
魔理沙は、これが自分にツケられている事を思うと肝臓に来たが、今はそれは考えぬ事にした。この機になんとか、宴に訪れた人妖に仕事の依頼を取り付け、支払いの当てにしようという苦労を続け、何とかそのめども立った。そうして今は、静かに泡麦茶をあおっているわけである。
「ねえねえ、」
小さな体に似合わぬビールジョッキを片手に、氷精がそんな魔理沙に近づいてきいた。
「魔理沙ってツンデレ？？」
ブフー
「うぇ……いや、ね。今日の問題さ。」
チルノの後ろから続いて現れ、見事にビールのシャワーを浴びたリグルが、今日の自分の考察を直接魔理沙にぶつけた。
曰く、最初の問題の意図。わざわざ法則性を見つけやすくし、見つけねば解答かなわぬような問題を配し。殆ど不可能なように見えても実は何とか解ける問題。そして、リグルが最後の問題の解答を示した時、魔理沙はもっと少ない方法があると言った。にもかかわらず、正三角形を直角三角形二つにばらしたお前の解の方が最適の解より美しいから、お前の勝ちだ。と言って、この宴会を開いてくれたのだ。
「ん～そうさな。確かに、解いてほしいって気持ちがないかって聴かれれば嘘になるんじゃないかと思うぜ。閉じるムーンライトレイを作らない。絶対解けない問題を作るのは簡単なのに、そうしないんだからな。」
「え～、なになに？」
自分のスペルの名前を聴きつけてか、新月の夜には屋外でも闇を出していないルーミア、丁度屋台のヤツメウナギを売り切ったミスティアに、橙や藍も魔理沙の元へとやってきた。
リグル達に向けていた視線を、遠く空に浮かぶ星に投げ上げて、魔理沙はつづけた。
「スペルカードと同じさ。解答が、用意されているからこそ美しい。混沌と不可解のどこかに、秩序と体温が見出せるからこそ。……考えた事がある。私達はなぜ戦うのか。私達はなぜ遊ぶのか。スペルカードは、何の為に作られたのか。あれは、自己表現なんじゃないかと思ったんだ。お前達だって、自分の信念やそれに依った力を、弾幕にしてるんだ

ろう?」
　そこで、魔理沙は話を聴く者たちを一瞥した。いつの間にか、妖怪たちと共に戦った子どもたちに、上白沢慧音もそこに加わっていた。
　一同は、小さくうなづいた。
「それを避けさせる、答えを見つけさせるって事。それはぶっちゃけた話、相手の事を知り、互いを理解する為にあるんじゃないかって思う。自分の譲れない信念をぶつけ合い、それを理解しあうのが、この世で最も美しい弾幕であり、戦いなんじゃないかなって。」
　酒に酔った彼女は、普段より饒舌だ。
「お前たちは、難しい問題にもあきらめずに戦ってくれた。私は、今こうして借金王にされてしまったが、それを差し引いても少しうれしいんだ。私をわかることを、あきらめずにがんばってくれたお前達と、こうして話せる事がさ。お前達があきらめてしまってたら、この気持ちは味わえなかったはずだ。」
　いつになく、彼女は優しい微笑みを皆に向けていた。
　里を飛び出して以来、一度も見る事がなかった様な優しい微笑みを、慧音はとても印象的に思った。
「わたしは、あきらめる事の罪深さを知ってる。あきらめる事が、誰かを傷つけることを知ってる。あきらめる事は、誰も幸せにしない。そうだろ? あきらめる事は誰かを、その誰かと一緒に居た自分といっしょに置き去りにする事だ。」
　昆虫たちの女王としてその責を負うリグルは、何となく理解できた。
　魔理沙の哀しさをたたえた笑顔の意味を。
　大切な誰かを、自分を捨てる事の怖さを。
　そして、それを簡単に許してしまえる逃げ道がたくさん広がっている事のなお言いようのない怖さを。
　つまらない世界があるとしたら、それはもしかしたら自分のせいだったんじゃないかと。
　今日、最後の問題を解いた瞬間に感じたあの感覚が、感じた生きるという事を虚しくさせないために絶対に必要なんだという事を。
　この霧雨魔理沙という人間が弾幕の無い世界にいたら、今より確実に不幸だっただろう。
　そして、それは自分も同じ。弾幕が、相手を理解する事、それをあきらめない事の大切さを、教えてくれた気がした。
　周りの皆も、思い思いの方法でそれぞれ何となく理解しているようだった。
　それでいいんだろうと、リグルは思った。
　何となく、わかればいい。
　きっと、人の想いは完璧に伝わる事はないんだろう。
　だけど確かに、伝わる事があると、わかったから。
　魔理沙の言う誰かがあの人かどうかなんて、どうでもよかった。
「さて、宴もたけなわ。ここで一つ寂しい新月の空に花火を咲かせる事になってるんだが、お前らどうだ?」
「第二ラウンドってわけだね、あたいの強さを今日こそ思い知らせてあげるわ!」
「そうこなくっちゃな。この花火の興行収入で、今日の宴会代半分稼ぐ予定なんだ。また、お前ら全員で来てもいいぜ? まとめてきれいな花火にしてやるよ!」
「ふん! そっちこそ、今度も虫の餌代にしてあげるよ!」
(魔理沙ー、1~2ボス相手にだらし無い事しないでよー!)
(屋台のママさーーん! やっちまえーー!!)
(ちえぇぇぇぇぇぇん! お前がナンバーワンだーーー!!)
(ルーミアはあのネクタイがいいよね!)
(何言ってんだゴルァ、八重歯キャラがデフォだろ!)
(八重歯じゃなくて牙だと何度言えば以下千行略)
(そんなことより、残暑厳しい折だ君達。氷精の話をしないか。)
(ウホッ、ローアングルｋｔｋｒ!!)
　オーディエンスも、酔った勢いで思い思いの主張を張り上げ、大いに盛り上がる。こういう点については、彼らも、この弾幕ライヴに参加していると言えるのではないだろうか。

最も光り輝く拠り所を失った新月の夜空は、他の何時よりも星々が輝く。
その、小さいが思い思いの色に輝く星々の下へと、舞い上がった誰もが信じていた。
今夜は、今までで一番楽しい弾幕が見られることを。
弾幕を避ける。
それは、何よりも困難で、危険で、楽しく、幸せな世界。
ぎゅっと、帽子を目深にかぶり、魔理沙が命名決闘の開幕を宣言する。
「さあ、この世で最も美しく、無駄なゲーム。第二ラウンドだ！！」

あとがき

路傍に一つの絵が展示されているとします。
道行く人の一部が、その絵を見ます。その中のさらに一部の人が、その絵に良し悪しに付け興味を持ち、感想を抱きます。
絵の下には、
『もしよろしければ、下記にご感想をお送りください』
こうして描いた人の下に送られてくる感想のお手紙は、関心を持った人の内、おおよそ1／100と言われています。それぐらい、反応をいただくというのは珍しくかつ偉大な事なのですね。99人興味を持っていても、反応はもらえないかもしれない。逆に言うと、1人の後ろに100人。素敵な事でもありますよね。
幻想郷は、本当に素敵な所だと思います。楽しくスリリングに、こうして想いを交換し合う事が当たり前のように行われているのですから。私自身頭固いので、作品作りは自分の言いたい事ありきだとか、作品は誰かの為じゃなく自分の為に書くのが8割以上だと思っているというのもあります（笑）。
商業誌なら、当然成果ありきのモノづくりをするのが正しい考え方です。
でも、一人の人間が、自分の思う所をそのまま、絵にしろ文章にしろ音楽にしろ物語にして、どんな拙い物でも一つの作品として完結させる為に要るエネルギーは、凄まじい物です。たったひとりでもそれをやり通す気概と覚悟にこそ、人は信じてついていってあげようと言う気持ちを持つんだと思います。そこからはじめて、人とのつながりが生まれて、いろんな人に支えられた、私たちも知っている〃すごい〃と言われる作品が出来る。そういう骨組みになると思います。
そういうたったひとりの戦いを認めてあげる場がないと、物作るってやっていけないと思うんです。この素晴らしい企画のように。
一人で、自分の為に戦う覚悟＝見えない物や、誰かを信じ続ける勇気が、何か物を作って誰かに見てもって、そこに意味を生み出すには絶対必要で、多分それが物を作り上げることの驚くべき難しさであり、とても大切な意味なんじゃないかなと思っています。
それが、人と付き合うっていう事だと思います。何よりも困難で、危険で、楽しく、この世で最も美しく、無駄で、幸せな世界。

〈参考文献〉

オマージュ：走れメロス（太宰治）
魔法陣の法則：ブックオフで立ち読みした数理パズル本
円周率の問題：東京大学入試問題（東京大学，'05）
東方風神録（ZUN）
正三角形のフュージョンパズル：出典不明。教えて下さったのは数学の偉大な恩師F先生
それぞれの証明：私

〈作者コメント〉

まず、とても長いです。最後まで読んでいただけたとしたら光栄至極です。なんか、魔理沙の物語みたいですが、メインはってるのはリグル達という妙な内容です。原案を閃いてから制作に割ける期間が三日足らずしかなく、頭の中の話をざっとテキストに落としただけ。問題や証明考えるのも時間が足らず、拙い作品で残念です。証明ミスってたら恥ずかしい。私は似非理系なん。次は、もっと作品の主張に全登場キャラを活かした、自分で納得できる話が書ければと思います。

9月号テーマ
スポーツ特集
『夏しり』　てつ
スポーツ特集のつもりで爽やかに。
何が足りないって……それは「赤」だと思います。

『 沖釣り 』　ADDA

幻想郷には海がないんですけど…　まあ、スポーツならレジャースポーツ、レジャーなら沖釣り！
それで海の大魚を釣ろうとするリグルです。よし！そのまま勢いよく投げて！

『 空手？いいえ、カポエイラです。 』　蛍光流動

多彩な蹴り技をもつ格闘技でリグルキック。

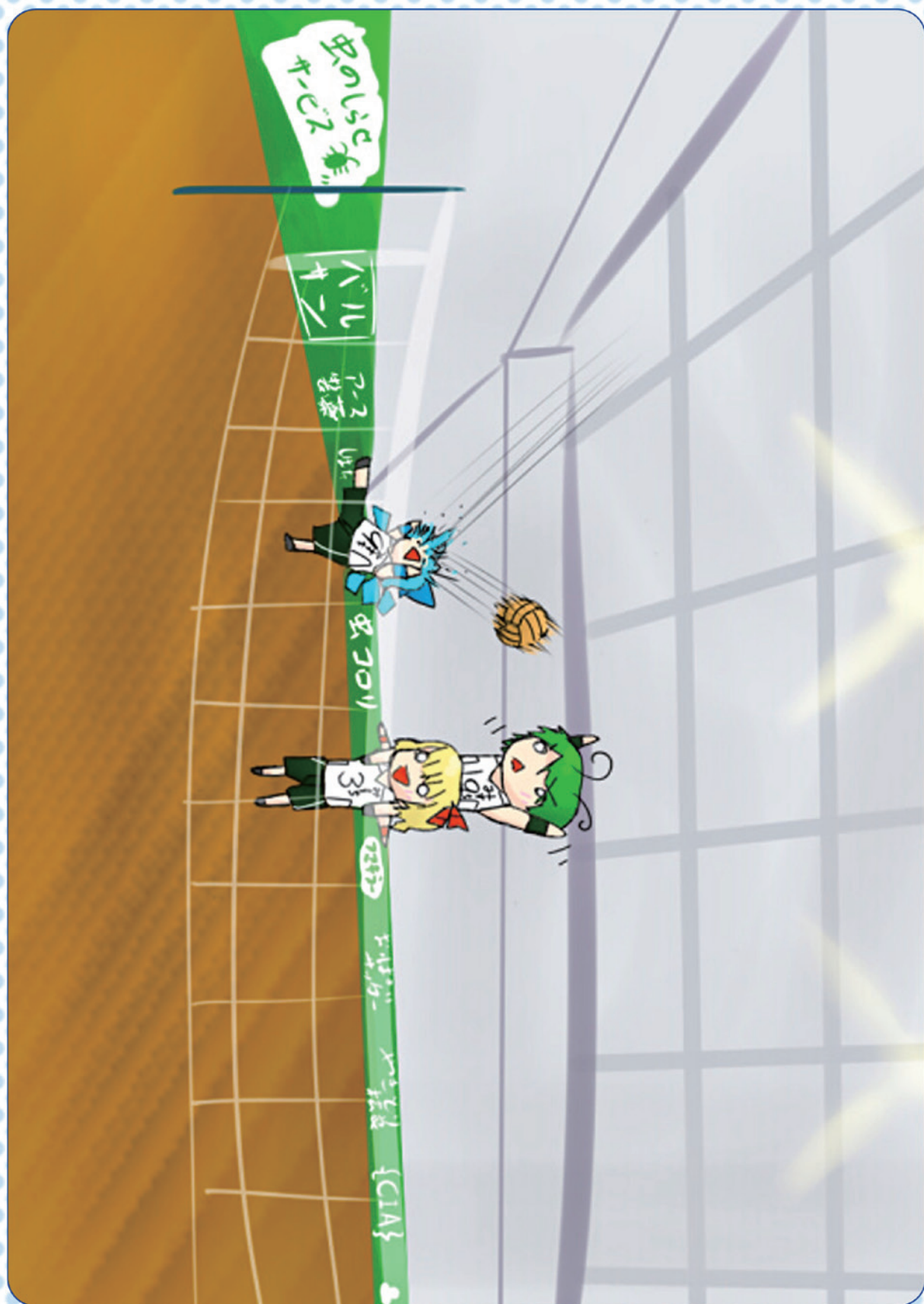
『 無題 』　亜人

初投稿させていただきます。スポーツ特集と聞いてこれしか思いつかなかった程度の脳。

『スポーツ(笑)』　ニトリフ

時間の都合で背景ケチりましたスイマセンorz
ぐだぐだ日記サイトのほうもよろしくお願いします → http://hareyumetop.otogirisou.com/

『 無題 』　草加あおい

誰てめ絵ですねぇ。
スタート前の緊張感、不安等がうまく伝われば幸い。
日焼けのコントラストが良いと思うのはマニアックですかね？

『 無題 』　モ誠幹

解説のみすちさん「おーっと、ここで３番と１９番の合体ブロックが出たーッ！」
ちるの「ほデュあッ」

『 バスケな感じ 』　豆板醤

いつもの四人に＋αを描きました。大ちゃん。みんなでバスケな感じ。実際はしてません。
動きやすい服でおkかな？的な・・・背景・・・すみません・・・

『 新ジャンル「わらじスパッツ」 』 mimidori

スパッツはいいね、リリンが生み出した文化の極みだよ。あーさすりたい。

『ばれーばれー！』　緑

スポーツといったらWi○よりエキサイトピン○ンとかが思いつきましたが我慢しました。

この作品には蟲描写や写真が含まれています。
蟲の手帖
描いた人 HOUSE
9月号
2009 SEPTEMBER
四話目 一周目
リグル・ナイトバグ
今月のゲストは私か。
早速だけどリグル、あんたスポーツは好き？
スポーツはいいぞ。
ちょ…ちょっと!!

…あのホラー特集なら先月終わってるんで
出オチ…
出オチ言うな
知ってるよスポーツ特集でしょ？

話題作りに鬼の所へ行ったら口癖を感染されちゃってさ
地下の鬼ってそんなんなのか
…はぁ
3-D

ところで目下ダイエット中だって？成果は出ているわけ？
ぎく。
え!? あ…う

あんまり美味そうだと私が食べちゃうぞ
どーれ
ムニ
ムニ
ひええ!?
いやーッ
何このデジャヴーッ!!

さて冗談はこれくらいにして
パッ
べしゃり
ふぎゃッ

手遅れになる前に何とかしなさいよ
はひ
ぜぇ
はぁ

何なら土蜘蛛族に伝わる伝統的なしごきを味わわせてあげようかー？
1.カエル跳び千回
2.神社までのランニング
3.BBAの猛特訓
4.旧地獄で合宿
オーディエンスー
さぁどれがー!…
ちょっと待てーーッ

何よー 少しはムチ入れないとそのうち腹筋もできない体になっちゃうわよ？
肉糯袢的な意味で
いくらなんでもそれはない
失敬な。

つまり今のあんたは普通のダンゴムシ以下よ!!
えー

でも スムーズに上げ下げできるかと聞かれたら今だって怪しいでしょ筋力的な意味で。
うぐぐ

それだけじゃないわー、幅跳びではバッタに負け

ウェイトリフティングではカブトムシやアリに

長距離走(…走?)ならアサギマダラに

トライアス
ケラ

じゃ 読書の秋？
短歌でも嗜む？
あんた詠めんの？

詠めるわよ失礼な
雀の小便たご
それも良いけどー…
芸術の秋とかどうかな
彫刻や陶芸鑑賞とかー

メイガ鑑賞とか
アヤナミノメイガ
開張 19mm

蛾特集いいよね
えー
蜘蛛の方が芸術的よー
巣とか特にー
えー
クモの巣怖いからヤダー
・・・・・・

まさか・・・
冒頭のネタのためだけに
私の作業場に来たのか
こいつらーー・・・!!!
じわ・・・
放置プレイの上の
寒い展開に
生暖かい感情を
こらえきれない
射命丸であった。

藍「ちょっとスッパいぞ」

羅外

続きません。

めゝすの着つぉぽす
何やってんの
あんた達……
ひえぇ
ふふふ……
季節は正に
すぽぉつ
なのよ!!
でもリグルったら
冬眠のよーいとか
ぬかすのよ
そこであたいが
さいきょーの
すぽぉつ着を
教えている訳
なのよ!!
ずびっ
さよか
でも無理強いは
やめとこうよ
こーりんどーで
入手した「ぶるまぁ」
なるアイテム!
これ一つであらゆる
すぽぉつに対応!!
正に
さいきょーの
格好ね!
果たして
本当に
そうなのかー?
何ぃ
!?
イメージ映像でお送り
しています。

イメージ映像でお送りしています。
確かに……スポーツ着としてブルマは優秀だと言っておく
しかし少々入手が困難ではないだろうか？
そう言った点から考え私はこれ……短パンを推奨するのだ
むむっ!?
たしかにまにあっくさがぬけたぶんけんこーてきなみりきがつよくなっている!!
しかもちらりずむまでもりこめるにくらしさ!
やるじゃんルーミア!
ガシィ
それほどでもないのか！
何よこの空気
また……また無理やり……
お嫁に行けないよぅ・・
クスクス……それで満足とは片腹痛いわ
何をー!!
これいじょうのさぷらいづがあるというのか……

ドオオオン
ゆうかりん!!
着目点は良いけどまだまだ甘いわね
素材を考慮した上で私が奨めるのはこのスパッツよ
動きやすさと吸水性は勿論の事……
にまあ…
細身の身体との相性も良いし、何より……
ゆうかりん!
ゆうかりん!
フフフ……もっと讃えていいのよ?
……ホントになんだ、これ
イメージ映(略
み、みなまでいうな!!
この角度はさぶらいずなのかー!!
さ……寒いよォ
ちょっとまって
いくら何でも動かずにそのカッコじゃね…
虫だし

ふわっ…
はい
風邪引いたら困るでしょ？
あ…ありがとうみすちー
ふえ？
スパッツ＋パーカーだとっ!!
ガーン
実際の映像です
こいつは一本取られたわ!!
みすちー！
みすちー！
わっしょい
わっしょい
ああ…ぬくもりを感じる…
よく考えたら何一つオチてないよ!?
いいのコレ!?
ちょ！やめなさいって!!

100ドル札出せば舞台から遠くてもすぐ見つけてくれるでござるの巻

えとおはなし　uchu-jin

パチュリグな日々～プロ野球編～

そんなことより野球しようぜ!

描いた人　東

ええーっ何故いきなり野球?

しかもなぜ魔理沙口調…?

みんなの間で今流行ってるんだパチュリー姉ちゃんも一緒にやろうよ

一応ルールは知ってるけど…

喘息もあるしスポーツはちょっと…

大丈夫だよボールは友達!

キモくないよっ!

おいぃ!?

答えになってないうえにパクリかよ!

と、とにかく
パチュリー姉ちゃん、
野球がしたいです
諦めたらそこで
試合終了だよ!

わーん

しょうがないわねぇ…
ま、野球は力や体力だけの
スポーツじゃないから
私の頭脳と知識を駆使すれば
勝てるってとこを見せて
あげるわよ

と、いうわけで…

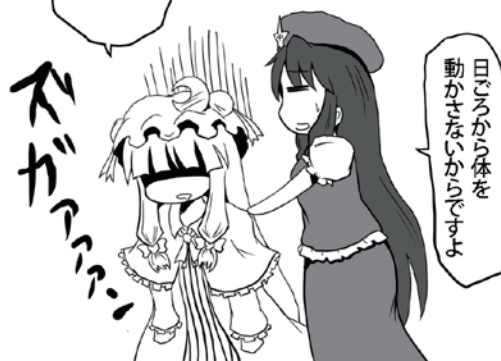
まずは準備運動
からだね

そうね

「ライオンに襲われた野うさぎが
逃げ出すときに肉離れしますか?
準備が足りないのです」
ってオ○ムも言ってたもの

…数分後

燃え尽きたぜ…
真っ白にな…

ズガァァァァン

日ごろから体を
動かさないからですよ

えぇー

弱っ

!?

これでは、野球どころではありませんね。ざんねん! おわり

上白沢卓球センター

猫いたひと：怒羅悪

○野ー！的なノリで

ユニフォーム

ルールを覚える過程は省きました（笑

ルールはあっても意味がありませんでした（笑

先入観

しっかり握りましょう

コッ
ご主人達は改めて試合中のようです

よし!いくよっ!

あっ
あぁっ!
ドゴ

ちょっと!君大丈夫?!(リ)
アディオス…ご主人…
うわぁぁ!さっき医者居たよね!(リ)
あたいったらさいきょーね!(チ)
誤魔化すな!(リ)

リグると!
やきぅ1

早苗さんに外の世界の「くさやきぅ」というスポーツを教えてもらいました。

お、これは私達の武器じゃないか
ゆーぎにも教えてやろう
鬼ぃ様方がますます凶悪に・・・!

それー
消える弾幕だぞー

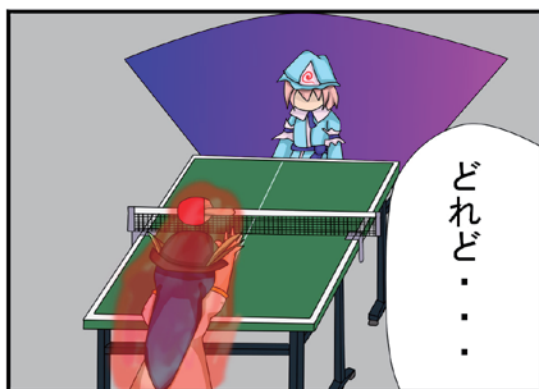
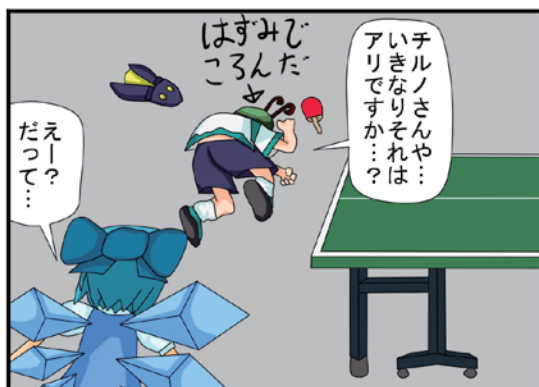
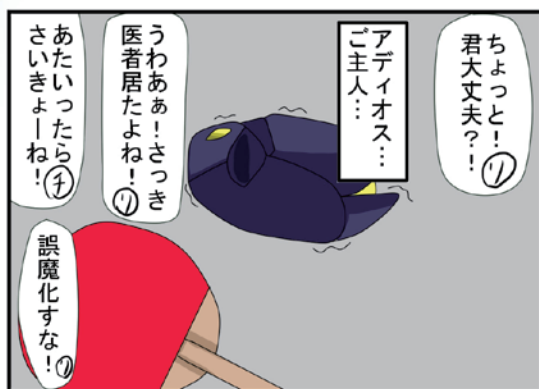
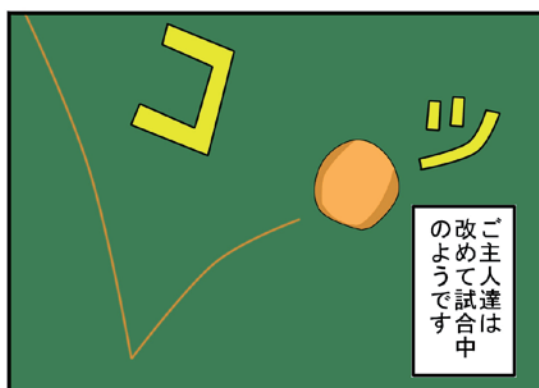
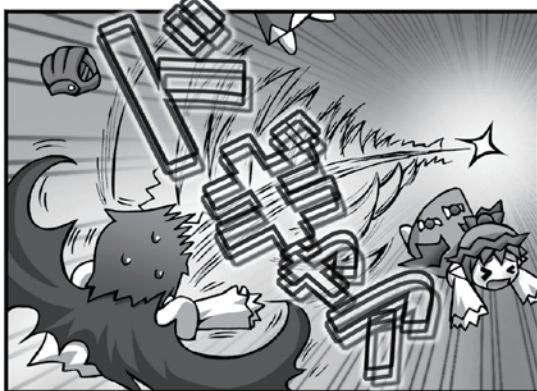
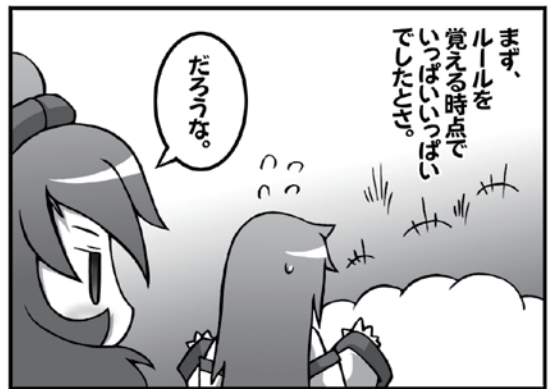
まず、ルールを覚える時点でいっぱいいっぱいでしたとさ。
だろうな。

リグると!
やきぅ2

おりゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあ
剛速「マスターストレート」

はーいっ
リグル、行ったわよ~
コッ

人間以上に実力差がありすぎるな
ボクシング並の階級分けが必要ですね

ひどぅん

紅軍
鉢巻
え・ぶん　角衛巾秋水

今日は待ちに待った運動会だったりする

だりぃ～

夜蟲

りぐるってば

は？

何その結び方 男みたい

夜雀

別にいいじゃん どんな結び方だろうが

サイドは隠す
高めに
あたま
髪結んであげる
初猫
UV
日焼け止め～
あ、ありがと
かあーっ
結ぶ
おっぱいでかすぎた
女の子にとって運動会は
そわそわ
イスだよ。
競技前から戦いなのだ
つかれた
END

風祝の謀

著者：くろと

　里の共有掲示板。そこには求人広告や落し物、迷子の子犬まで、多くの人に報せる紙切れが貼り付けられている。その中に埋もれるように文々。新聞から切り取られた告知が貼られていた。その内容は『大運動会実行委員会からのお報せ。常勝紅組のリーダーは霧雨魔理沙。そして霊夢。白組のリーダーは博麗新進気鋭の青組は東風谷早苗がリーダーに決定。参加者は丑の刻に……』と書かれていた。
　また掲示板にも期限というものがある。それは求人期間が終わったり、迷子が見つかったりすれば掲示板から外すのが定例だ。そして文々。新聞の広告はその掲載期間をまさに今、過ぎた。すると新聞の切れ端自体がそれに気付いたように、無風にも関わらず掲示板から剥がれ落ちた。ヒラヒラと揺れながら、落ちる先は掲示板の近くに設置された紙資源再利用を促す四角い箱だった。

　守矢神社の中では二人の少女が話し合っている。
「早苗さん！　ほ、本当にこんなカッコで踊るんですか！？」
　大声で文句を言うのは、臍までも無いノースリーブに太股から上が見えそうなぐらいのミニスカートを穿いた少女だ。頭からは二本の触角がちょこんと生えており、ショートに揃えた髪の色は映えるような緑である。
　リグル・ナイトバグだ。
「ええ、そうですけど？　あ、似合ってますね。健康的で可愛いですよ」
　振り返ってリグルに笑い掛けたのはこれまた緑の髪の少女。しかし、前髪には小さな白蛇が絡まり側頭部には蛙のワッペンが貼られている。そして白と青を組み合わせた巫女装束。しかし、彼女は巫女ではない。巫女の様な役割を持つ守矢の風祝、東風谷早苗である。
「可愛いとかじゃなくて！　その、こ、この服、布地が、臍とか見えて恥ずかしいしみっともない……」
　早苗という人目に見られたためか最初の勢いはどんどん衰え、最後のほうではほとんど呟くような小声となる。そして恥ずかしそうにミニスカートを両手で押さえていた。
「大丈夫ですって。ちゃんとえろ……ではなくてみっともなくなんかありません。それでは練習を始めましょう。しっかり練習しとかないと釣れ……勝てませんから」
　言い直した言葉の端々には僅かながら悪意を感じ取れた。しかし、リグルとしてはそんなことを気にするよりも、早く別の服に着替えたいという思考の方が勝っていた。
「あ、あの……」
「ダメですよ？　皆で弾幕勝負して最初に負けた方がチアリーダーになる。最初にそう決めて、最初に負けたではないですか。貴女が」
　そう、これは民主的に話し合って合理的に決めた。ちなみにその時のメンバーには妖精も居た為、リグルは自信満々に、負けたやつ

が悪い。とその場で宣言してしまった。
「それはそうだけど！　でも、あの時は早苗さんまで参加するなんて聞いてなかったし！　やっぱり無効試合だよ！」
　そして予想外にも青組リーダー東風谷早苗が参戦し、リグルに対して集中砲火を浴びせた。リグルは手も足も出したが、当然のように撃墜した。
　早苗はリグルの言い訳を聞きながら、はぁ、と溜め息を漏らした。そして。
「無効試合ですか。……あんまり我が侭を言わないでください」
　早苗がリグルの素肌である臍を指圧した。
「ひゃっ！？」
　いきなりの感触にリグルが可愛らしく小さな悲鳴を上げる。だが、早苗はそれだけでは留まらない。
「どうしてそんなことを？　些細な事じゃないですか。それとも……私と交わした約束を反故にするのですか？」
　そのまま正中線を辿って早苗の指が上に登る。その際もう片方の手はリグルが逃げないように腰をしっかりと押さえていた。具体的には吐息が掛かるほどに密着して抱きしめている。
「やっ」
　なすがままの状況にリグルは頬を上気して、目の前にある早苗に対して恥らう。リグルは顔を逸らすが早苗は逸らさずに頑として見つめている。
　やがて早苗の指は顎にまで至った。と。
「ん？！」
　早苗がリグルの顔をぐいっと引っ張った。つまりは正面を、早苗の方へと向かせたのだ。手で固定されているので早苗から視線を背けることすら出来ず、お互いに顔を直視する。
「意固地ですね。いい加減にしないと組み伏せますよ？」
　言葉の最中で早苗は足払いした。すると早苗が覆いかぶさる形でリグルが下になる。いつの間にか、リグルの両の手首は早苗の両手で押さえつけられていた。そこまで至ったリグルは、最初から一つしか無い答えを紡ぎだした。
「わ、わかったよ！　やればいいんでしょ！」
「やっぱり妖怪は素直ですね」
　早苗はにっこりと笑い、額にキスを落とした。

□

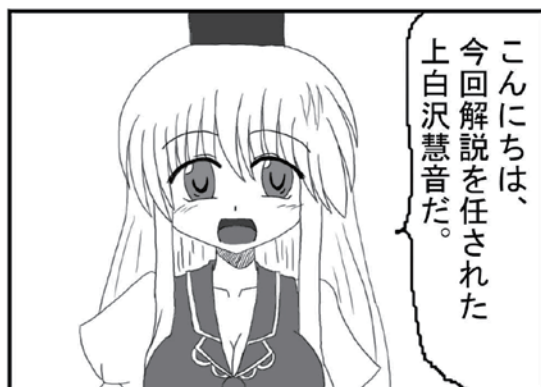
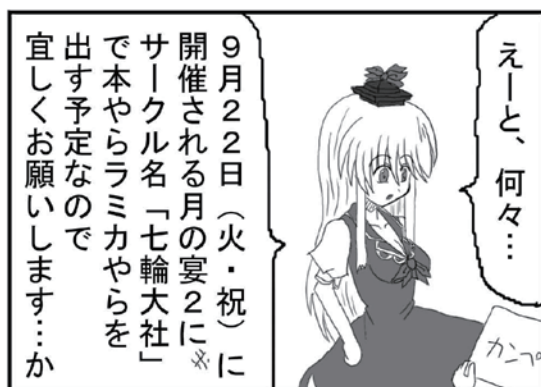
　本陣は杭を打ちつける三角テント張りで、そこでは実況や司会進行が行われていた。その横には紅、白、青と三色の造花が貼り付けられた大きな掲示板がある。
　今、行われている競技はスタンプラリー競争である。そして実況席に座って実況しているのは射命丸文だ。彼女はシャッターチャンスを逃さぬように首から掛けた写真機を常に構えている。そして、構えたレンズの獲物が黒土に白線を引いたトラックへと戻ってきた。それは紅いもんぺをサスペンダーで吊るす少女、そのすぐ後には竹箒で低空を高速飛翔する白黒の少女だ。
『竹林スタンプラリー！　最初に無事コースへと戻って来れたのは藤原妹紅！　次いで霧雨魔理沙！　熾烈な一位争奪戦です！　共に早い！　もっとも私の高速には遠く及びませんが！』
　文が気軽に言いつつ、しかし、事態は急変する。
『と、ここで妹紅転倒！　一位は魔理沙に決定か！？』
　言うが早く、魔理沙が妹紅を抜き去った。だが、会場は小石一つ落ちていない均された場所。普通に考えて転ぶ事などありえない。だとするなら。
『起き上がった妹紅の前に立ち塞がるのは……鈴仙・優曇華院・イナバ！　どうやら狂気の瞳で藤原妹紅の方向感覚をずらしたようです！』
　すぐに幻視から復帰した妹紅が鈴仙を睨みつけて反撃に転ずる。
「魔理沙みっけ！」
　ゴール直前の魔理沙にもトラブルが生じた。それは紅を基調とした子供サイズの洋服に就寝用のナイトキャップを被る幼女だ。それは魔理沙自身が良く知っている知り合いで、文がその名前を高らかに叫ぶ。

『ここで悪魔の妹フランドール・スカーレットが乱入したぁ！　霧雨魔理沙がゴール目前で足止めを喰らう！』
二箇所でEX級の弾幕が発生する。一応、競技中の弾幕勝負は赦されてはいるが、それは試合に出ている選手同士限定だ。だが、そんな細かな約束事を文は気にしなかった。それよりも弾幕を撮る方が重要だと判断したのだろう。
『あ、たったいま後続の因幡てゐがゴールしました！』
文が気付いたのは、因幡てゐが颯爽とテープを切ってゴールした後だった。犬走椛によって勝利者インタビューが行われ、その両隣では激しい弾幕戦が展開されていた。
それらの光景を目と耳から眺めていたリグルは引き攣った表情をしていた。
「なんだか意味不明な度合いが……」
「そんなことを言ってる場合ではないですよ。ほら、点数的に私たち青組が負けてます」
早苗が見つめる先は本陣の傍にある大きな掲示板。そこでは妖精たちが白い造花を貼り付けていた。また掲示板全体を見ると、紅い造花が一番多く、白い造花は次に多く、青い造花が最も少ない。それらは得点だった。
「前半は負け越しています。次の競技で差を広げられると青組の勝利は厳しいものになります」
「えと次は」
リグルが考えるよりも早く、写真撮影を終えた文が説明しだした。
「続いての競技は各組代表一名による応援合戦です！　代表選手は準備してください！」
ああそうだった。とリグルは表情を暗くした。その表情を見た早苗は激励する。
「大丈夫、あれだけ練習したんです。自信を持って」
「……そうですね。いってきます！」
着替えに向かったリグルを早苗は笑顔で見送った。

先ほどとはうって変わって文は実況席に縛り上げられていた。今度は逃げ出せないようにとの実行側の配慮である。
「応援合戦は通常競技と違い、投票によって加点されます。その先陣を飾るのは白組アリス・マーガトロイド」
文が言い切ると特設会場にアリス、その後ろに演奏者ルナサ・プリズムリバーが上がる。ルナサは空中に複数のバイオリンや弦楽器を構えた。
「三、二、一……」
ルナサの指揮の下、弦楽器たちが演奏を始める。曲目は『ブクレシュティの人形師』だ。
アリスもまた一〇体以上の人形を繰り出し、応援演技を開始する。それは人形劇だった。ただし、普通の人形劇ではない。操縦者が指一本、関節一つも動かさない人形劇だった。それらはまるで人形が自律して一人勝手に踊っているような感覚を見ているものに与えてくれる。
やがてルナサが弾いていた曲が段々と小さくなり終わりを迎える。するとフェードアウトする曲と一緒に踊っていた人形達が落ちていく、それは螺子巻き人形のゼンマイが止まったようだった。
すぐに文が感想を下す。
「さすがに常日頃人形劇を披露しているだけあり完成度、注目度ともに素晴らしい演技です！　続いては青組、下馬評では最下位だったリグル・ナイトバグの演技です！　どんな演技を見せてくれるのでしょうか？」
特設会場からアリス、ルナサが降りると、かわりざまにチア服のリグル、演奏者メルラン・プリズムリバーが上った。メルランは一度だけリグルを見ると、リグルは合図で返す。メルランはすぐに楽器たちを宙に浮かした。
「せーのっ！」
躁気味にメルランが曲目『蠢々秋月～Mooned Insect』を弾き始めた。そして布地が少なく今にも見えそうな衣裳でリグルが溌剌なダンスを踊りだす。
青組の自陣では、兎耳をちょっと焦がした鈴仙が状況を冷静に分析していた。そして、分析した結果をリーダーである早苗に切り出す。
「あんな演技で応援合戦に勝てるの？」
ダンスのレベル自体は低くないはずだっ

た。だが、あの人形劇を見た後だと明らかに見劣りする。
「まず無理でしょうね。一朝一夕の付け焼き刃。とてもではないですか他の二人から票なんて稼げません」
　当然のことでしょう。とでも言うように早苗がはっきりと告げる。最初からこうなる事を見越していたようにも見える。
「……試合を棄てたの？」
　まさか、と早苗は仰々しく驚いた。ただ、二つの目だけは欠片も驚いていない。
「票数によって一〇〇点差からでも逆転できる大一番。逆にいえば勝負が決まりかねません。ふふ、心配いりません。細工は万全です」
　含み笑いで早苗が説明しだす。
「細工は万全って、日本語間違えてない？何したの」
「……実はあの衣裳、にとりさんに協力してもらったんです」
　早苗が言った直後、強風が吹いた。それはいつもよりも少しだけ強い風であり、別段演技の邪魔になることも無い風だった。しかし、リグルの演技がピタリと止まった。
　それはリグルが状況をすぐには理解できなかったからだ。
「……え？」
リグルが呆気を漏らすのと同じく、クスクスと早苗が微笑を漏らした。
「ほら、あのように強風に吹かれると服の光学迷彩が解除されて透けるる仕組みなんですよね」
　リグルは今、服を着ているのに着ていないのと同じ状態だった。そのささやかな胸もそれを包む下着も曝け出している。
　その光景に今まで静観していた観客や文が騒ぎ出す。そして限られた情報から得られる結論を文が出した。
「な、なんと！　突風がリグル・ナイトバグの服を剥いたぁ！」
　その言葉で自身に起きた異常事態を理解したリグルが、恥辱で顔を茹蛸のように真っ赤にした。
「いきなり下着だけになんてなれば大騒ぎになります。後は証拠の服さえ隠滅すればこの応援合戦、無効試合に出来ますよ」
　何事も無かったように冷静なのは守矢の風祝。その目論見どおり応援合戦は無効試合が決定した。

（終）

〈作者コメント〉
　楽しいスポーツ……のはずでした。気付いたら剥いてました。でも服は着ています。これも臍チラでしょうか？　オチが弱いのはお約束になりつつあります

楽屋ウラ的何か。番外編
イベント告知バージョン

先生よろしくお願いします。

注：こんなリグルは出ません。

描いた人：草加あおい
（サークル：七輪大社）

※配置はこれを描いている時点では未定です。

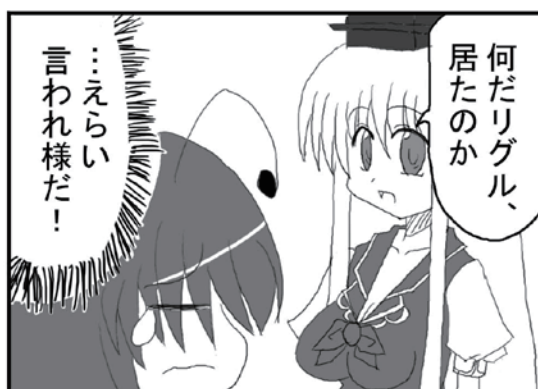
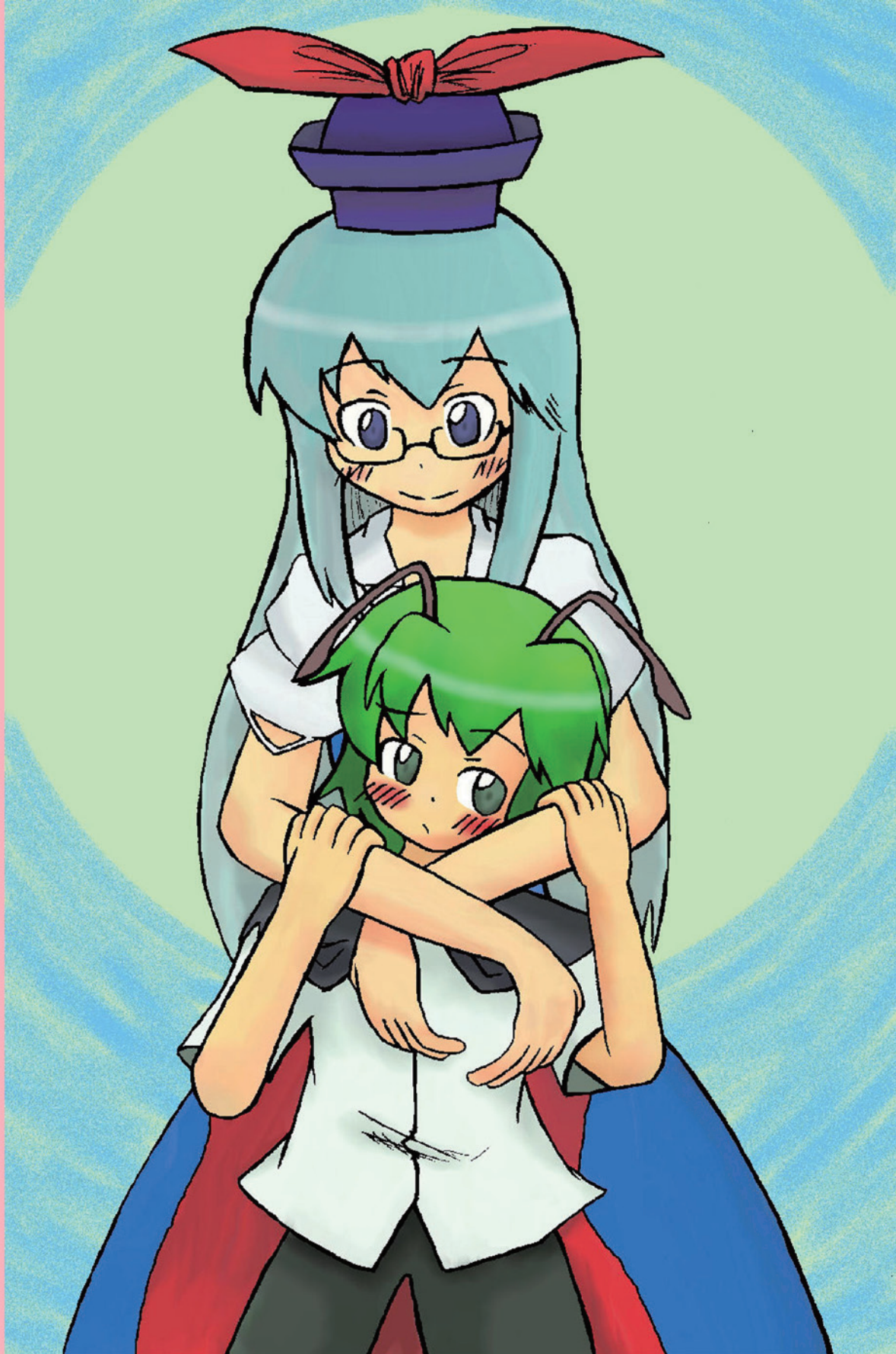
けーねはロリ巨乳設定。

と、そんな感じで私達のお話の他にも別の作者様の作品などもありますので
ぺこり
9月22日は是非七輪大社のスペースまで遊びに来てください

まぁ、他の作品は他キャラが出演しているのだがな
全ボス登場が目標なのだ。
月バグですよこれ!?
これ以上リグル分を減らす発言は止めて下さいよ！

おまけ。

ゴゴゴ
どうしたもこうしたもないわよ。何で私達のマンガじゃなかったのよ！
あー、一応今回は永夜抄イベントですからね…

オホホホ
あら、そうなの。じゃあ次は私たちが…
ドキドキ
言えない…今回の続きや他のネタも暖めているなんて言えない…！

Illustrations of September
扉絵：
貴キ
『激しくデジャヴ…』
夏コミでいっぱいいっぱいだったので
ちゃちゃーっと何も考えず描いてみたら
7月号表紙と被ってるような…；
■夏コミは有難う御座いました！

▶ リグルは割と里に近い妖怪なんじゃないかなぁと、文の『里に最も近い天狗』という表記を見て思ったり。
里に近い＝慧音と仲がいいってどんだけ安直なんでしょうか。

▶ このスペルを取得する為に散っていった128組のゆかれいむを僕は忘れない。
--http://rshk.uijin.com/

初めまして。第６珈琲という者です。リグル大好きです。
自分の絵に自信はないのですが、絵を描く事は好きなので今回意を決して投稿してみました。
とりあえず二時間じゃ碌な背景が描けないことを思い知らされました。あゝ無情…。
拙い作品ですが、自分もリグル好きの同志に入れていただければ幸いです。

▶ 私の住んでいる所、今年はあまり夏らしい日が無いです。雨の日が多いせいでしょうか？ともかく、みなさんに暑中見舞申し上げます。　さて、レポートを仕上げなければ……

▶ やっぱり暑い日はスク水ですごすに限ります。

蟲の願事　～三話～

著者：社　蛍夜

「・・・ここは何処？」

　リグル・ナイトバクはどこか、見知らぬ場所に立っているようだ。

　木々の生えた緩い斜面。落ち葉で柔らかい地面。どうやら、山の麓にいるという事は分かった。

（・・・妖怪の山じゃないようだし・・・なんだか頭がぼんやりするな）

　そんな事を考えながら、周囲を見渡している。すると、不意に足下に何かが居る気配を感じ、リグルは急いで下に向いた。

「なんだ、鈴虫か」

　足下に居たのは鈴虫だった。良く見ると、周りには様々な蟲達がいる。

　と、蟲達の様子をみていたら、少し離れた所の鈴虫が、音を鳴らし始めた。それが合図だったかのように、他の蟲達も音を発し始めた。

　そんな蟲達をリグルは、自分のいない所でも元気にやっているんだ、と思ってなんだか笑顔になってきた。

　が、急に真下から異様な威圧感を感じ、下を向くリグル。そこにいるのはさっきも見た鈴虫、違う事は音を鳴らそうとしている事と、その異様な威圧感だった。

　そして、その鈴虫が羽音を鳴らした瞬間、リグルに頭痛が襲いかかった。両手で頭を押さえるリグル。

　足から力が抜け膝立ちになり、そして上半身が傾く。が、それを片手を使って支えた、そして目の前にいる鈴虫の姿をした何かに問いかけた。

「お前は・・・誰だ」

　だが返事はなく、また音を鳴らす。そして、リグルは片手で耐えきれなくなり、ぐらり、とリグルの体はそのまま倒れ、眠った。

※※※

　チルノ達は全力で、来た道を戻っていた。向かっている方向から鈴の音が聞こえる。その音を聞き、ミスティアが喋る。

「チルノ！また聞こえたよ！」

「わかってるわよ！」

「ねぇ、チルノちゃん。あの鈴の音、本当に怪しい奴の出していた音なの？」

「そうよ！それにもうリグルの家が見える・・・」

　わよ、と言おうとしたときには森が終わり、一軒の家の前に出た。そして、家の前には仰向けに倒れるリグルと、怪しいローブにフードを被った誰か。背丈はリグルと同じくらいか。

　その誰かはリグルの横に立ち、鈴を付けた右手をリグルの顔の前に出している。

「リグルーーー！！」

　チルノが叫ぶ。その声に驚き誰かは振り返ったその時、手と懐から鈴の音がした。誰かは急いで隠すが、その音を聞きチルノ達が目を丸くする。そしてチルノが飛び出し、リ

グル達へと向かう。
「あたい達の仲間に何をしたぁッ！」凍符『パーフェクトフリー・・・
　スペルカード詠唱しようとした。それに反応し、ミスティアが声を上げる。
「え、ちょ、チルノ！リグルも危ない！」
「ッ！・・・ならこれで！」
　詠唱を止めると手元に冷気を集め、大きめの氷柱を作り、手に取った。そして、誰かへと走っている勢いを乗せ振り下ろした。
　だが、そんな大雑把な攻撃は横っ跳びをしてかわされた。が、回避した先には真っ暗な闇の空間があった。ルーミアの能力によるものだ。
「あたしの闇の中でも、同じように避けれるかな・・・？」
　その中に入っていった誰かは、周囲全てが闇である事に驚き、振り返る。すると、目の前に爪を振りかぶったルーミアが待ち構えていた。
　ルーミアは振り返った事に驚くが、すぐに爪で切りかかる。だが、かわされフードの一部にかする程度だったようだ。そして、避けた勢いでそのまま闇から出る誰か。
「ちッ！」
　舌打ちしながら破れたフードを引っ張り顔が見えないようにし、逃げようとした目の前に、今度はミスティアが立つ。
「私を忘れないでほしいわね」
　そう言うと、既に振りかぶっていた爪で切りにかかる。さすがに避ける暇が無かったのか、今度はしっかりと当たったが、頭のフードの半分ほどが飛ぶ程度だった。
　誰かは攻撃の反動で後ずさりする。ポタポタと顔を押さえる手から血が落ちる。その手を拭うように動かすと、ミスティアを睨みつける。
「・・・お前、誰だ」
「・・・・」
　その顔を見て、ミスティアが質問した。ここら辺では見た事が無い奴だ。しかも、その知らない奴がリグルを襲っていた。何故なのか、そう考えていたミスティアの動きは、鈍くなっていた。
　その隙を見て、誰かはミスティアと反対方向へと走る。
「っな！？逃げるな！」
　不意を突かれ距離が開く。ミスティアはすぐに追うが、距離はつかず離れずで追い付けない。
　だが追われる誰かは逃げきれない、と思っているようだ。焦りを隠せない表情を前に移すと、ルーミアがいた。誰かはルーミアに掴みかかると、そのまま後ろへと押し出した。
　ミスティアはルーミアがこちらに来たのを受け止め、そのまま倒れこんでしまった。ルーミアを避けて起き上るも、誰かは既にいなくなっていた。
「っくそ！」
　丁度横にあった木に当たるミスティア。三人がかりでかかっても捕まえられなかった。そう考えてしまい、腸が煮えたぎる。
「リグルちゃん！しっかりして！」
　大妖精の声に振り向くミスティア。リグルの方を向いたときには、チルノがリグルを揺すっていて、横で大妖精とルーミアがおろおろしている状態だった。
「リグル！！」
　ミスティアもすぐに駆け寄り、揺すろうとした。その時、
「ッつ！ち、チルノ。首が痛いっ。や、やめっ」
　リグルは目を覚ました。その事に安心し、揺する事を止めるチルノ。
「リグル、大丈夫？変な奴に、何かされたりしなかったか？」
　ミスティアが起きてすぐのリグルに分かるよう、ゆっくりと話す。
「ん、変な奴・・・？」
「そう、目深にフードを被ったローブの奴」
「・・・いや、覚えてないな」
「・・・リグル、思い出せる事はどの辺まで？」
「え・・・っと、皆を見送って、家の中に入ろうと・・・」
「・・・？どうしたの、リグル？」
　急に考え込むリグル。そして、
「そうだ、家の中に入ろうとした時、後ろに誰かいた・・・かも」
「・・・かも？思い出せないの？」
「ぼんやりとだから・・・でも、誰かいた気がするのは確か」

「とにかく、あいつが犯人みたいね。あたいが捕まえてやるわ！」
「落ち着いて、チルノちゃん。まずはリグルちゃんを家の中に・・・」
「大丈夫だよ。また・・・昼間のように寝ればすぐに良くなるよ」
　そう言うと立ちあがろうとするリグル。確かに立ちあがったが、顔が真っ赤で少しふらついている。それを見て、ミスティアが横から肩を貸す
「あー、もう。そんな状態を大丈夫なんて言わないの」
　さらに横からチルノが手を貸す。
「あたいたちをもう少し頼ってほしいものね」
「あ、ははは。ありがと、みんな」
「とにかく布団でゆっくり寝なさい。ほら」
　そういうと、リグルの手をつれて家の中へと入って行った。森の異変に気付かずに・・・
（終）

〈作者コメント〉
　こん○○わ。社です
　いーかげんマズイですな。文章。
　やっつけで書いているとはいえ、読者の皆様に楽しんでいただけないものを書いては、意味がないですので・・・徹夜漬けな日々です。
　さて、んでは今回からしっかりと出てきました。謎の誰かさん。彼女は誰なのか・・・ほんと誰だろうねー。作者もあやふy（
　外見に関しては、そのうち挿絵でも付けようかと思ってるのですが・・・画力が足りない！？　誰かＨＥＬＰ！！

リグルと収穫祭

著者：MAL

コンコン、コンコン。

「リグルいるー？」

「はいはーい。誰ですかー？」

　リグルが戸を開けると、おもむろに笑みをこぼした。そしてリグルは一言話した。

「久しぶりだね」

　それは夏の終わりに相応しい訪問者であった。

＊＊＊

「あっ、そこに座ってて。はい、お冷」

「ありがと。リグルは元気だった？」

　お冷を貰うとすぐに懐かしい訪問者はそれを一気に飲み干した。それを見たリグルは新たにお冷を汲みなおした。

「うん。ところで静葉は？」

「静葉は人里で何か買ってくるって言ってたわ。まぁ、すぐ来ると思うわ」

「二人ともまだ元気でよかった」

「神様が病気とかありえないでしょ？」

「それもそうだね」

　リグルは笑いながら答えた。釣られて穣子もつい笑ってしまった。

「ところで秋は近いの？」

「そろそろかもう入ったぐらいよ」

「はっきりしないね。秋を司る神様なんだからその辺はしっかりして欲しいよ」

「司るってただ豊穣の神様なだけ。そこまではやし立てなくてもいいわよ」

「いや、そんなつもりはなかったけど……」

　穣子の下手な冗談のせいで会話が途切れてしまった。それと同時に戸を叩く音が聞こえてきた。まるでそれを見計らったかのようだった。二人の視線は瞬時に戸の方へと向いた。

　戸はすでに開いていて訪問者が顔を出していた。その訪問者はリグルにとっては予想通りと言っても過言ではない人物だった。

「リーグール！　あーそーぼ！　ってその生焼き芋臭い人は誰？」

　突然の訪問者は見知らぬ人がいたので首をかしげた。そうだったかと思ったリグルは穣子の事を説明した。

「生焼き芋臭いって……。この人は秋穣子。秋、じゃなくて豊穣を司る神様よ」

「えっ、えっ、神様！？」

「ただの芋臭いおばちゃんだと思ったら大間違いよ。私はれっきとした豊穣の神様なんだから」

「てっきりおばちゃんだと思った」

「ルーミア。さっきから発言が失礼だよ。穣子は私達妖怪と違って神様なんだよ」

　リグルの言葉でようやくルーミアは神様に無礼をした事に気付いた。元から神様は崇拝しないルーミアにとってはどうでもいいことだが、たかがそんなことでこの場の空気が濁るのは嫌だったのでルーミアは改まって自己紹介をした。

「私はルーミア。今後ともなにとぞごひいきを」
「穣子よ。ひいきするのは嫌いだから絶対にしないわ」
リグルにとって不安が募る自己紹介だった。もうすでにライバル意識らしきものが芽生えている気がする。
「ところでさ。なんでリグルは神様である穣子と知り合いなの？」
思いついたかのようにルーミアはリグルに質問した。大体この事は聞いてくるだろうとリグルは察知していたのですぐに答えた。
「えーっとそれはね。かなり昔の話で」
「いいの？　あれは辛い過去じゃなかったの？」
リグルが話そうとした言葉をを穣子がさえぎった。気付けば先ほどまで笑っていたはずの穣子は真剣な顔をしていた。
「いや、いいんだ。親友の前で無駄な隠し事が多いのは後に響くからね」
穣子は納得した様子を見せた。そしてリグルは一度咳払いをした。
「まずは穣子と出会う数日前の話をするよ」
そしていつもより少し真面目な顔をしながら穣子との出会いを話し始めた。

＊＊＊

何十年も前に幻想郷で大飢饉が起こった。そのときは悲惨で多くの人間が死んだ。そして満足に人間を捕食できないため多くの妖怪も死んだ。もう少しで幻想郷のパワーバランスが崩れるほど大きな事件だった。
なぜ、大飢饉が起こってしまったのか。里の者たちは今年だけ異常に多かった虫のせいだと思い込んだ。そして虫といえば虫の王と言えばそう、真っ先に私が疑われた。急遽、里は妖怪退治の依頼を神社に申し出た。
「覚悟しなさい」
そのときに私を退治しに来たのは博麗霊夢だった。里からの絶大な人気いや、力が増しているであろう私を倒すことができる人間は彼女しかいなかったからだと思う。
しかし実際のところ私の力なんて増大していなかった。今の今まで衰えていた虫の力が何の原因もなく増大するわけがないのだ。
「ちょ、ちょっと待って！　なんで私を退治するの？」
「何をとぼけた事を。あんたが今回の飢饉の犯人なんでしょ？」
「飢饉……一体何のこと？」
「やっぱり頭の悪い妖怪には何を言っても伝わらないわね」
その後、霊夢は私をあっさりと倒した。だが私に止めを刺すことはしなかった。一瞬、情けをかけられたと私は思った。でもそれは見当外れな考えだった。
すでに戦える状況ではない私を霊夢はさげずんだ目で見ていた。
「あんたにはまだやってもらわないといけないことがあるのよ」
そう言うと霊夢は私を肩で担ぎ、里へ連れて行った。
里は見るに耐えない様子だった。飢えで苦しむ人間が数多くいた。その中には動けれていない人間もしばしばいた。元気な人間は人間で私を見るなり誹謗中傷な発言を私に浴びせてきた。挙句の果てに泣き始めた人間もいた。
みんな揃ってなんだよ。私だって立てないほどの激痛を伴っているのにさぁ。私が飢饉を起こした？　今じゃ力のないただの虫の王である私がそんなことをするとでも？
やがて霊夢は里の長がいる家にたどり着いた。その入り口で私は地面に叩きつけられた。それはまるで私が物であるかのような乱雑な扱いだった。
「約束どおり今回の元凶のリグル・ナイトバグを退治してきたわ。あなたの言うとおりに生け捕りでね」
「霊夢や、ありがたい。ほれ、約束の報奨金ぞ」
「また、退治して欲しい妖怪がいたら呼んでね」
霊夢はさっそうと長の家を飛び出ていった。取り残された私は一体何をされるのか想像もつかなかった。
次の日、その答えが明確になった。
ここは幻想郷の未来を担う農作地だった。今の季節、稲の一つや二つは必ず見られるは

ずだった。それが跡形もなくただの荒地と化していた。
「おぬしは虫を束ねる妖怪じゃろ？　ならばおぬしのその手で今回の飢饉の原因を探し出し、全滅させてほしいんじゃ」
　これが目的だった。人間の手には負えない事態は妖怪にまかせる。それにしてもこの人間は物を頼む態度がなっていない。第一、半殺しにした時点で言う事を聞くはずがないのは百の承知なはず。いまさらなぜ私に頼むようなおろかな真似をするんだろうか。
　私にはこの有様を見てすぐに今回の飢饉の犯人がすぐに分かった。でも、仮に私は虫の王であって人間の手駒ではない。そう易々と仲間を殺せるわけがない。
　これらのことから私の口から出る言葉は当然限られていた。私は伏せたまま顔だけを里の長に向けて言い放った。
「そんなことまっぴらごめんだね」
　その言葉を聞いた刹那、里の長は手にしている杖で私の頭思いっきり叩きつけた。里の長がどれだけの力を込めているのか、どれだけ私を憎んでるのか、それをどれだけ今まで押さえつけていたのか、薄れ行く意識の中でそれがよく分かった気がした。
　この後、何があったのかは覚えていない。次に目覚めたときは顔中に走る痛み、口からの出血、目の腫れ、脇腹辺りにある骨は折れてる。そしてまだ私は荒地と化した農作地にいた。この様子だと里の長は私を好きなだけ叩いた後にそのまま放置したに違いない。放置しているところを見ると私がてっきり死んだと思ったに違いない。
「人間どもめ、妖怪を甘く見たな。その気になればお前らなんて一握りなんだよ」
　私は地面に向かって大声を出した。そして不敵の笑みを浮かべた。それは自分でも気味が悪いほどのものだった。

＊＊＊

「リグルって意外と執念深かいんだね」
　ルーミアが簡素な感想を述べた。リグルは思い返すと確かにそんな気がした。
「でもね、私を執念深くしたのは人間。人間は妖怪より身勝手な生き物なんだから」
　人間の部分だけを強調してリグルは言った。今のリグルは笑顔だが、心の奥底では溜まっている怒りを露にしているだろう。ルーミアと穣子もそれは分かっていた。
「でもリグルってそこまで人間を嫌ってなかったよね？」
　だがずっとリグルと共にしているルーミアには違和感があった。どちらかと言うとリグルは人間に好意を持って接する妖怪だったからだ。
「今はね。それは穣子と静葉のおかげなんだ」
「えっ、『あれ』で人間を嫌わなくなったの！？」
『あれ』でって私にとって『あれ』は考え方が変わるほどのことだったんだよ」
「私はたいしてだと思ってたけどね」
　二人の間でしか通じない会話に苛立ちと焦りを覚えたルーミアは尋ねた。
「ねーねー。『あれ』って何？」
「あー、ルーミアは知らないよね。じゃあ穣子が話して。私が『あれ』を話すと偏見が含まれすぎるから」
「偏見……確かにそうね。わかったわ。私が話してあげる」
　興味津々なルーミアは穣子の顔をしっかりと見ていた。少々照れ臭かったのか頭を何度かかく仕草をした穣子はそのままの調子で話し始めた。
『あれ』って言うのは飢饉が起こった年の収穫祭での出来事で――」

＊＊＊

　収穫祭の日に私は里にお呼ばれした。私が里に訪れるとそこは目をつぶりたくなる光景が広がっていた。
「えっ、ちゃんと豊作にできたはずなのに」
　去年が去年だったので今年こそは豊作にしたつもりだった。でも今年は去年と続けての不作だった。
　私は驚きを隠せなかった。全く状況が把握できていない私に里の長は飢饉の原因を簡潔

に話してくれた。
　里の長が言うにはウンカという虫の大量発生によることが今回の飢饉の原因で、それの根本を辿るとリグル・ナイトバグがそのウンカたちを指示して里を滅ぼそうとしていた。そしてその根本のリグルは霊夢によって退治された。ということだった。
「それですまんが来年は必ず豊作にしてくれんか？　里の命運がかかっているんじゃ」
「分かった。豊作のことは私に任せて」
　でも私には自信がなかった。今回の原因が虫である以上私の手の及ぶ範囲ではないからだった。
　その後、里では盛り上がらない収穫祭が行われていた。一部の人は私が故意に二年間続けて不作にして飢饉を起こしたと思い込んでいる者がいるのだから仕方がなかった。
　その盛り上がらない収穫祭に突如悲鳴が響き渡った。
　私達、里にいる者はすぐさま悲鳴の聞こえる先を見つめた。その先から一目散に逃げる人がやってきた。その人は声が出ていない。荒い息遣いをしながら自分の来た道を震えた指で差していた。
　私の目には様々な人が見えた。立ちすくんでいる人、しりもちをついている人、倒れている人、こちらにゆっくりと歩いてくる人。だが、それのどこがおかしいかが分からなかった。
　一方、里の長は口をパクパクしている以外の行動が取れないほど体がこわばっていた。
　逃げながら一人が叫んだ。この一言により私はこの事態を把握することが出来た。
「り、リグルが来た！　リグルが来たぞー！」
　あのゆっくりとこちらに向かって歩いている人こそが今回の飢饉の元凶のリグル・ナイトバグだった。それを見ると私の中で怒りが生まれた。私は普段怒りというものをあまり抱かないのだが里を潰そうとするその傍若無人な行為には腹が立った。
　私はまず話し合いと言う無難な解決策を選んだ。傷つけあうことはあまりいい結果を生まないからだ。
　私がリグルに話しかけようと顔を見るとそれは傷だらけであった。殴打痕がくっきりと頬の辺りに、まぶたの周りには出血した跡が、他にも多々生々しい傷跡があった。
　私には何があったかわからなかった。頭の中を整理しているうちに里の長が私に話してくれた内容がふと浮かんだ。
「リグルにウンカの駆除を頼んだが断られてのぉ。あやつは死にかけの妖怪の癖に生意気じゃったわい。その後しばらくしてから息を引き取ったがな」
　頭の中で里の長の話を整理するとやっぱりおかしい点があった。しかし、唯一この疑問を聞ける里の長は私の近くにはいなかった。
　きっと誰かが里の長の命を助ける為に連れて行ったのだろう。
　リグルは私に見向きもしないで横を通って行った。そのとき、私はこの疑問を解決できる策を閃いた。
「誰にやられた？」
　私はリグルの方に向かって言ったつもりだった。でもリグルは私の言葉を聞いて振り返る様子を見せなかった。
　もう一度私が同じ問いかけをしようとしたとき、リグルの返事が返ってきた。
「里の長だ。邪魔するならお前からにするぞ」
　依然としてリグルは歩く足を止めなかった。私はリグルを止めたかった。里の長を救いたい。そんな陳腐な気持ちではなく単純にリグルが可哀想に思えたからだ。
　だが私の手足は動かなかった。私の頭の中では激しい葛藤が行われていた。
　それは新たに生まれた死に対する恐怖。それは新たに生まれた里の長に対する憎しみ。それは新たに生まれたリグルに対する同情。それは今まで持ち続けている誰も死なせたくない切な願い。
　こうしているうちにもリグルは少しずつ、少しずつ里の長が逃げたであろう民家に近づいていた。でも私の足は一向に動き出そうとしない。この状況を見つめることしか出来なかった。
「止まれ！　害虫！」
　いきなり里の男共が叫び声を上げた。里の者から見ると団結して妖怪に立ち向かう勇姿だった。しかし私の目には弱者をいたぶる下衆な行為にしか見えなかった。

自分の家から持ち出した護身用の槍を持つ男達がリグルの周りを囲む。だがリグルはそれを気にせずに歩いていた。
「打てー！」
　一人の男が手を上げた。それと同時にリグルに向かって四方八方から十数本の槍が投げ込まれた。ただでさえ怪我をしているリグルがこれを避けれるはずがない。
　私はリグルを甘く見ていた。予想通りに鈍い音を立て、何本か槍が刺さり、致命傷に至るはずの怪我をリグルは負いながらも執念で動き続けるほどの精神を持っていたのだ。
　リグルは槍が刺さろうとも後ろを振り向かずに前に歩き続けていた。一方、新たに武器を持ち替えた男が数人リグルに向かって走り始めた。
　今、目の前には守りたい人がいた。守りたい人が今にもやられそうな状況なのに私の足はすくんでいた。一つ深呼吸をして、たまった唾液を飲み、私は意を決して土を全力で蹴った。無我夢中だった。肩から男の背中にぶつかり、一緒に倒れてもすぐに立ち上がってまた突撃を繰り返した。相手が鎌を持って牽制してようが、桑を振り回していようが今の私を止めれるほどの意思の強さは持っていなかった。
　私がリグルに加勢したことで大きく戦局が傾いた。私の必死の戦いのおかげでついにリグルは里の長が潜む民家まで来ていた。
　リグルの足が止まると同時に手をその戸に向けた。誰もがこの光景を見て唖然とした。
　一匹の蜂が私の目の前を横切っていった。続いてもう一匹、さらに三匹と気付けば羽の音が辺りに響くほど蜂が集まっていた。
　その音は次第に小さくなっていった。それもそのはず、全部が里の長のいる民家に入って行ったからだ。
　そして叫び声やら悲鳴が聞こえてきた。それは今でも忘れることが出来ない人が死ぬときの奇声だった。
　そう、リグルは自分の手で里の長を殺してしまった。私もリグルの手助けをしたので言わば同罪だった。
　私は急いでリグルの所に行った。そして体をがっちりと掴み、空を飛んだ。今は逃げないと私とリグルの身が危ないと私は思った。

＊＊＊

　ここから数ヶ月に渡り私達は各地を転々と逃げ隠れしていた。
　私が負った傷は浅いものでよかったがリグルの方は重症だった。でも徐々に傷口がふさがっていた。私達は妖怪の生命力の偉大さを目の当たりにしていた。
　そして数ヶ月の間に季節は私が得意とする秋から冬になっていた。
「色々とかくまってくれてありがとう。でも大丈夫なの？」
　一番大丈夫でないリグルが私達の事を気にかけてくれた。
「いいのよ。首を突っ込んだのは私だし」
「本当にこの年になっても首を突っ込む穣子が恥ずかしいわ」
　先ほどまでいなかった穣子の姉である静葉が話に割り込んできた。手には今日の朝食を持っていた。
「朝見たら罠にかかってたみたい。今日は満足に食べれそうね」
「んっ！　お、おいしい。静葉、この肉は何？」
「野うさぎよ。それをさっとバターで炒めたのが今日の朝食よ」
　リグルは一心不乱に食事を取っていた。でも他の二人の箸は思うようには進まなかった。
　なぜならここの住み家にはもう１ヶ月以上滞在していたからだ。もう潮時は過ぎているかもしれない。穣子は次の移動先を考えていたが、しかし幻想郷は狭いせいか隠れる事に適した場所が思いつかなかった。
　今の住み家は空き家だった場所だ。ぼろくて風がよく通っていて、まともに冬を越せるような環境ではない。その点、ここは絶好の隠れ家だった。
　私達はそれに甘えすぎていた。突然、戸が壊された。三人は氷になったかのように固まった。
「残念だけどここで死んでもらうわ」
　戸を壊したのは紛れもなく霊夢であった。

霊夢の手には銀色のにぶくて光る針を持っている。そしてそれを躊躇なく手から飛ばした。
　私達の頭を数針かすっただけでよかったが霊夢はまだ針を隠し持っていた。まさに絶体絶命のピンチだった。
「ちょっと待って。この二人には罪はないよ」
　私は驚いてリグルの方を向いた。そこには両手を頭の後ろに置いているリグルがいた。
「私が里の長を殺した。だから私だけが悪い」
　リグルは一歩ずつ霊夢の方に歩み寄った。よく見るとその足は震えていた。
「何かっこつけてるの？」
　霊夢は鼻で笑った。次に霊夢は手から針を全て床に落とした。
「ただの脅しよ、脅し。そんなに反省しているんなら安心したわ。そんなに反省したリグルに一つだけやってもらいたいことがあるのよ。そう、ウンカの駆除をね」
「私にウンカの駆除を……」
「私からもお願いするわ。これじゃあ豊作なんてできっこないわ」
　予想外の出来事が立て続けに発生したせいで立ちすくんでいた私だが恥ずかしい事に声だけは立派に出た。でもリグルの中にはやはり虫の王としてプライドがあった。さてはリグルの頭の中は葛藤状態に陥っているだろう。
「とりあえず本題は言えたから私は帰るわ。あんた等もこそこそ隠れずに堂々と暮らしなさいよ。自分でお尋ね者とか思ってるか知らないけどそんなことはないんだから」
「えっ？　私は里の長を殺すのに手助けしたのに」
「元からあの里の長の人望がなかったって話よ。金で物を言わす性格で昔っから嫌われていたの。それで文句を言うと暴力をして屈服させる。最低の長だったのよ」
「でも殺した事に変わりないじゃない」
「じゃあなんならここでくたばりたいの？　私も神を退治するなんて出来るわけがないからそんなこと言わないでよね」
　霊夢は後ろを振り返り、外に出て行った。そして一言だけ捨て台詞を残した。
「来年、期待しているから」
　三人は頭を下げて礼をした。二人はほっと胸を撫で下ろしたがリグルはそうではなかった。大きな課題を霊夢に与えられた。今のリグルの行動一つで里は滅ぶのだから事は大きい。
「なんでウンカの駆除をためらうの？」
　突然、静葉がリグルに聞いた。
「だって私は虫の王だから配下である虫を殺すことなんて出来ないよ」
「リグル、尊い犠牲も時には必要なの。それだけはわかって」
「……」
　しばらくリグルは黙り込んだ。ひそひそと私は静葉に言った。
「なんてこと言うんだよ」
「いいじゃない。このままじゃ一生答えを出さないわよ」
「でもさ、単刀直入に言いすぎだよ。もっとオブラートに包んで言ったらどう？」
「オブラートに包めば意味が弱まるのよ。それこそタブーだと思うわ」
「んー、そうかなぁ」
　またここから数日が経った。
　冬真っ盛りのこの日にリグルは二人の目の前で決断を下した。
「私、ウンカの駆除を手伝う」

＊＊＊

「と言うのが私とリグルの出会いだったと言うことでした……って姉さんいつの間にいたの！？」
「えっ、話し始めてからすぐよ。本当に穣子は熱弁しすぎよ。こっちが恥ずかしいわ」
「ところでリグルはあの後、駆除はできたの？」
「当たり前だろ。言ったことはちゃんと守ってたよ。そのおかげでこの家が建ったんだからね」
　ぱっと見るだけでこの家がいつ建てられたかは分かるわけがない。ルーミアは少しリグルを揺さぶりにかけてみた。
「嘘でしょ？　たかがあれだけで家を建ててもらえるわけがないよ」

「まぁ、その時の里の長に前の家は燃やされたからね。その謝罪の意味もあるんだ」
「やっぱり裏があったじゃん。んでさ、この人誰だっけ？」
　ルーミアが静葉を指差して言った。本日二度目の失礼な態度に対し、にやりと静葉は笑った。
「ああ、じゃあこれはいらないのね。折角皆で飲もうとしたのに」
　静葉が里で買っていたのはお酒だった。それも上等なお酒であって、普段ルーミアが口にすることはないほどだった。
「えっ、えー。本当に名前が思い浮かばないのにそれはなしだってー」
「姉さんは意地悪なんだから。ルーミアにも飲ませてあげてよ」
「飲ませるに決まってるでしょ」
　今夜は酒に溺れた。その次の日の朝はいつもより気温が低く感じた。
　リグルは寝癖のある髪を気にしつつも窓から空を見上げた。青く澄み渡っている空だった。
「いつのまにか秋が来たのか」
　寝ている三人と自分のためにリグルは水を汲みに行った。

（終）

〈作者コメント〉
　初めましての人は初めまして。ＭＡＬです。９月はもう秋かなぁ。と思い秋姉妹を出演させました。でも今回の話にたいしたオチはなかったり。初めはコメディを書こうとしたんですがいつの間にかコメディ部分消してほとんどシリアスに変えてしまった。次回あたりはコメディ系を書きたいです。長い文でしたが読んでくれてありがとうございます

八雲藍の手から放たれた弾は、まっすぐにリグル・ナイトバグの心臓へと向かっていく。

誰かの、息を呑む音が聞こえる。そのわずかな音が、しかしやけにゆっくりと感じられる。

顔面を青く染めているリグルの動きは鈍い。それを見て、藍は己の勝利を確信する。

この距離、そしてこのスピードを避けられるはずが無い。こうして蟲の王女は死に、世界の均衡は保たれるのだ。ちょっとした胸焼けのような後味の悪さだけを残しながら。

だが、そんな藍の予想を裏切る出来事が起こった。

突然リグルと弾の間に何かが素早く割り込み、爆発と共に弾を消してしまったのだ。

「な、何だと!?」

予想外の事態に藍は慌てる。だが、それでも冷静に状況を把握しようと努めた。

今出来事はリグルが関係しているのかと思ったが、リグル自身も目の前で何が起こったのか分かっていないようだった。ただ驚いた顔で、何事なのかと首を振っている。

では、一体原因は何なのか。ふっと視線を下に向けて、藍はその原因に気づいた。

蟲だ。黒い荒波となっていた蟲の一部がとっさに身を挺してリグルを守ったらしい。その残骸と思われるモノたちが地面に落ちていた。

これは完全に藍の予想外だった。蟲達は完全にリグルの支配下にあり、リグルが動揺した場合それらの動きも止まるものだと思っていたのだ。

なので、このように勝手に動き出してリグルを守るとは思ってもいなかった。

「ちぃっ、だがそれならそれで撃ち続けるまでよ!」

橙に指令を送り、挟み込む形で弾を撃ち込むことにする。

全身に怪我を負ったせいか、橙への指令がスマートにいかない。まるでラグが発生するように思った動きよりも遅れて行動しているようだった。

だが、今はそんなことは関係ない。リグルの気が弱っているうちに、一気に仕留めてしまわねば不利になるのは傷を負っている藍達である。

持てる力を込めて、弾を展開する。

正面、斜め、上空。様々な角度から弾を放つものの、それらは全て決死の蟲によって阻まれていく。だが、蟲達にも限りはある。藍はただ、撃ち続けるのみだった。

その光景を見つめるリグルの両肩が震えている。恐怖からだろうか。もしそうならば、このまま一気に押し込むことが勝利への道であろう。

蟲達の数が半分くらいまで減った時。ほんの僅かにだが、リグルへの防御が薄くなった。

藍はその一瞬を見逃さなかった。まるで針の穴に糸を通すかのような正確さで、その隙へと弾を放つ。それは蟲達の防壁を掻い潜り、リグルへと突き進んで行く。

仕留めた。今度こそ確信する藍の目の前で。

物凄い速さで上空から何かが乱入し、地面へと突撃した。その衝撃で、藍の放った必殺の一撃はまたしても防がれてしまう。

「く、一体なんだというのだ……何が私の邪魔をするというのだ!?」

二度も確信を裏切られ、藍の頭に血が上っていく。

その土煙の中には、二つの人影があった。

介入者と使命、そして

著者：夏樹　真

ちょっとだけ着地に失敗して、派手に土煙を立ててしまった。だが、登場の仕方としては十分だろう。後ろを見ると、土煙に咳き込んでいるリグルがみえた。なんとか助けることも出来たようだ。

間に合わせるために最大スピードに近い速度で突撃したため、一緒に来ていた方はうまく減速が出来ず盛大に地面にしりもちを付いてしまっていた。ちょっと涙目になっている。

「あいたたた、やれやれ……もう少しまともな方法は無かったのか？」

「文句を言うんじゃないぜ。これが最速かつスマートすぎる方法ってヤツなのさ」

その土煙が晴れていき、霧雨魔理沙と上白沢慧音は眼前にいる妖怪の式へと注意を向ける。

その介入は予想外だったのだろう。八雲藍は眉をひそめていた。

邪魔をされたことへの苛立ちからか、藍は叫ぶように問いかけてくる。

「貴様ら、一体何のつもりだ。どうして私の邪魔をする！」

「どうしても何も、私達はリグルに用があるのさ。お前に用事は無いんだぜ。しかし、弾幕で熱くなりすぎなんじゃないのか、お前らしくもないぜ」

挑発にも聞こえる魔理沙の台詞。

普段の冷静な藍ならばそんなものは受け流していただろう。魔理沙の口車に乗せられてペースを乱すのは馬鹿馬鹿しい事だと鼻で笑っていたはずだ。

だがしかし。

半ば冷静さを失いつつあった藍は、唇をかみ締めると物凄い形相で魔理沙を睨みつけていた。その殺意が、リグルから魔理沙へ移りそうなほどに。

そんな視線を受けても、魔理沙は飄々とした顔だった。むしろこの状況を楽しんでいるようにさえ思える、そんな表情。

「私は八雲の式だ、失敗は許されない。二度は言わないぞ、退け。私の邪魔をするんじゃない」

「使命に固執しすぎて冷静さを失うとか、式としては二流だぜ。少し頭を冷やしてやるよ」

魔理沙は視線で慧音に合図を送る。

それを見て頷くと、慧音はリグルの元へと走って行き、保護するように肩を貸して木の陰へと移動していった。蟲達は慧音を味方と判断したのか、特に襲ってきたりはしなかった。

リグルは自身の両腕をつかみながら震えていた。それが一体何から来る震えなのかはわからないが、何かを小言で呟いているようだった。この距離では良く聞こえないので、何と言っているのかは不明だが。

二人が避難したのを見てから、魔理沙は藍に向き直る。流石の藍もその間くらいは待ってくれたらしい。殺意だけは、魔理沙に向け

たまま。
「まったく、弾幕ってのはもっと楽しく遊ぶものだぜ。それを忘れてるようじゃ、ただの残念だな」
　本来、弾幕は遊びの要素を含みつつ勝負を決めるためのものだ。
　決して殺し合いにならぬよう。対等に遊べるように。そういったものであると考えている。
　藍が行おうとしているような用途に使用されることを、魔理沙は絶対に良しとはしない。
　そんな馬鹿馬鹿しい行いをしようとしている藍を、止めなくてはならなかった。
「煩い。貴様を倒して、私は使命を果たす。それだけだ」
　その言葉を合図に、藍は一気に魔理沙との距離を詰めるように突進をしてくる。
　対する魔理沙も、それに反応するように距離を取りつつ弾幕を放つ。威嚇と本命を混ぜつつ放っていくのだが、藍の高速移動を前に中々照準が合わずに当てることが出来ない。最も、そんな簡単に当たられても困るけどな、と心で思う。
　魔理沙との距離がある程度近づいたところで、藍は弾を発射しながら急に垂直に跳躍した。その弾を避けつつも、視線で藍を追っていく。
　その体に受けている傷から見て、藍はそんなに長時間の戦いが出来るとは思えない。つまり、一気に勝負を決めてくる可能性が高いと魔理沙は予測していた。そこに一発カウンターを決めさえすれば、こんな馬鹿げた戦いは終わるだろう。
　十数メートルほど飛翔し、藍は魔理沙を見下ろす。そして高らかに宣言する。
「一気に勝負を決めさせてもらう。いくぞ、幻神『飯綱権現降臨』！」
　スペルカードを宣言し、藍は弾を展開していく。
　過去に藍と対戦したことある魔理沙は、そのスペルカードの内容を思い出す。
　確か、このスペルカードは徐々に弾幕が激しくなっていき、避けるのが困難になっていきやられてしまうというスペルカードだったはずだ。
　つまり、勝機を狙うのならば。弾幕が激しくなり身動きが取りにくくなる瞬間しかない。
「やれやれだぜ、その熱くなった頭を更に熱くしてやらないとな！」
　密度の濃い弾幕を繊細な動きで掻い潜っていく。少しでも油断をすれば、被弾してしまいそうな緊張感。この中をいかに避けるかが弾幕の醍醐味だと魔理沙は思う。
　細かい動きで弾を避けていき、藍のスキを探していく。次第に焦れてきたのか、弾がどんどん派手に、大きくなっていく。
　今が、チャンスだ。魔理沙は懐からミニ八卦炉を取り出し、それを藍に向けて構える。
「これで決めさせてやるぜ、恋符『マスタースパーク』！」
　魔力を一気に集中させ、それを収束、そしてミニ八卦炉にて膨張。そして強大な魔力の砲撃を行う魔理沙の弾幕はパワーだぜっという言葉を体現したスペルカード、マスタースパーク。
　その強力な魔力の一撃は向かってくる弾を飲み込みながら、藍の元へと放たれる。
　勝ったぜ、そう思い相手の表情に目をやる。
　少しだけ驚いた表情をした藍だったが、その口がニヤリと歪むのが見える。
　魔理沙がまさか、と思ったときにはもう遅かった。
「式神『憑依荼吉尼天』！」
　藍は次のスペルカードを宣言すると、その体を丸めてマスタースパークのギリギリのところを突進してくる。
　やばい、と思う魔理沙だが一度放ってしまったマスタースパークは簡単に止めたりすることは出来ない。その仕組み上、打ち切らなければ身動きが取れないのだ。
　避けたくても避けれない、絶体絶命な状況。くそ、これまでかと覚悟を決めるしかなかった。
　眼前まで迫った藍に、思わず目を瞑ってしまう。
　ぶつかる、と思った。が、衝撃はやってこない。側を凄い勢いで何かが通り過ぎて行く

音と風が聞こえただけだった。
　まさかっと、藍の意図に気づいた魔理沙が首だけを後方に向ける。そこには、物凄い勢いでリグルと慧音に突撃しようとする藍の姿があった。
　やられた、と舌打ちをする。藍の狙いは初めからリグルだけだったのだ。つまり、藍とからしてみればなんとかして魔理沙の足止めが出来ればよかったのだろう。マスタースパークなんかは、その良い手段である。それを見抜けなかった自分に腹が立つ。
　慧音が藍に反応して身構えるが、スペルカードを宣言する時間は微妙に間に合いそうに無かった。かといって、今の藍を止めるには方法も無い。急いでスペルカードを宣言しようとする慧音の表情には焦りが浮かんでいた。
　万事休すか、誰もが最悪の事態を想像した時。またしても、予想外の乱入が起こった。
　一部の残っていた蟲達がまたしても集団となり、まるで壁となるように藍の前に立ちはだかったのだ。激突する、藍と蟲の壁。その僅かな時間差が、慧音にスペルカードを使うチャンスとなった。
「くぅっ、国符『三種の神器　鏡』！」
　宣言に呼応するように慧音の前に大きな弾が現れ、まるでそれを盾とするかのように、藍へと撃ち放つ。藍の回転と盛大にぶつかり合い、かろうじて弾き返すことへ成功する。
「がはっ、くそ……何故だというのだ……！」
　弾き飛ばされ、そしてその身に更なる傷を負ってしまった藍は体勢を立て直すなり言葉を吐いた。
　またしても、蟲に邪魔をされた。その事が藍の頭を混乱させているようだった。
　ようやく動けるようになった魔理沙が藍の背後にたって挟むような形となる。流石にこれならば藍も大人しくなるしかないだろう、と思っていた矢先。
　今度はまたしても予想外のところから事態は動き出すこととなった。
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」
　突然のリグルの叫び声。皆の視線が、リグルへと集まる。
　そこには、今までは違う。涙を流しながら、しかし決意にも似た何かを瞳に宿した、蟲の王女の姿があった。

（終）

〈作者コメント〉
　どうもー、夏樹です。なんというか、リグルファンの皆様には申し訳なかったと思います。リグルがいくらなんでも空気すぎる……
　今回はコミケ前ということで時間が無くてかなり短めですが、少しでも楽しんでいただければ幸いです。次がラストになるかな、多分。

漫画・自由作品、表1～表4　作者コメント

夏祭りぐる

戌亥　*p2*

自分的には、夏→夏祭り→締め込み少女、という図式が出来上がっているので今回こんなリグルを描いてみました。
趣味全開です。ホントはお題がスポーツということでぶるまぁとか描こうかと思ったら、以前既に自分で描いていました。
過去の自分とネタかぶり。

蟲の手帖

HOUSE　*p27～p30*

何このデジャヴ。略して何このデヴ。…ちょっと無理がありますか。蛾特集は写真をある程度撮り溜めたころにでもやってみたいなぁ。お題に合わせて写真を撮るか、手持ちの写真からネタを捻り出すかいつも悩みます。前者のつもりで描いても全然お題に沿えてないんだけどな！…イメージ貧困すぎる。

藍「ちょっとスッパいぞ」

羅外　*p31*

スポーツ特集なのに、相変わらず動きのない漫画ですみません。

すぽぉつ着のスヽメ

斑　*p32～p35*

カラーでスパッツ塗りたかっただけかもしれません。

100ドル札出せば舞台から遠くてもすぐ見つけてくれるでござるの巻

uchu-jin　*p36*

スポーツ特集ということで本格サッカー漫画を描いてみました。「そういう店じゃねえぞ」は北澤さんの、それ以外の実況はジョンカビラの声を想像してくださると幸いです。

パチュリグな日々～プロ野球編～

東　*p37～p38*

スポーツ特集とゆうことで、大好きな野球ネタで描いてみようと思ってたけど、結局何もせず終わってしまったw仕方ないね

上白沢卓球センター

怒羅悪　*p39～p42*

引き続き投稿のどらおです。
自分でスポーツと言った以上何かやらなければ、
ということでこうなりましたw
タイトルは後から思いついて、本当に語呂だけで決めましたw
それでは、失礼しました。

リグると！

ひどぅん　*p43*

今月号の締切は8/15…夏コミ東方日でした。
みんな、ステキなリグル本と出会えたかい？

紅軍鉢巻

秋水　*p44～p46*

モノクロ（茶色）初めてでした。トーンって何？
前回のリグルの胸がでかいと苦情（？）がきたので、小さくしようと努めた結果ああなった。あと、サイトのURL載せろと苦情（？）がきた、"piconano"でググってください（恥
運動会とか嫌いです！！（あ

無題

草加あおい　*p51～p52*

そんなわけで、9/22のイベント月の宴２に初のサークル参加です。どきどき。　七輪大社のＨＰ「七輪で焼け」
アドレス：http://sichirin.blog45.fc2.com/
宜しければこちらもご覧くださいませ。何故か同日の紅のひろば２にも参加しております。人海戦術ってス・テ・キ。

リグロスワード

mimidori　*p75*

■リグル殆ど関係ないとか言っちゃ駄目。言わなきゃ誰も気づかないはず。きっと。多分。恐らく。　■埋まらなかったマスの数×1時間虫取りに励め、ってリグルが言ってた。　■解答は後日http://www.pixiv.net/member.php?id=120405にて発表します。

表紙

小崎

へそのゴマに含まれる健康成分サントリー　セサミン

月刊ナイトバグ　2009年9月号

2009年8月22日発行
企画・編集：神楽丼／小崎
http://www8.plala.or.jp/denpa/indexdon.html

原作　上海アリス幻樂団
東方projectリグル・ナイトバグファン企画　web配布／自由投稿参加型月刊誌

編集後記

(1)「金タガメ　銀タガメ　茶タガメ」左の言葉を早口で続けて3度、正しく唱えよ。(5点)

某有名女子校の入試問題です。(嘘)
頭のスポーツ＝数学の問題を扱ったJade.さん作の解けリグルは、個人的に今月投稿頂いた作品の中でも、特に目の付けどころが面白いなぁと感じました。こういうテスト問題って、社会人になった今見ると胸が高鳴るのはなぜなんでしょうね。受験生の頃は見るのも嫌だったのに。動悸？ 動悸、息切れ、不整脈？ ちなみに、創刊以来初めての挿絵(著者自作！)入りのｓｓ作品でもあります。

今月号は、コミケ当日の〆切となってしまい、人によっては厳しすぎる日程だったと思います。それにも関わらず、コミケ参加組の方からもかなりの数投稿を頂きまして、編集としてはありがたい限りです。普段の月だと、やはり最終日＝〆切り当日の投稿が多いんですけどね。今月は、ほとんどの投稿がその前日までに届きました。(笑)　やはり、無茶をして頂いたんだなーと実感した次第です。

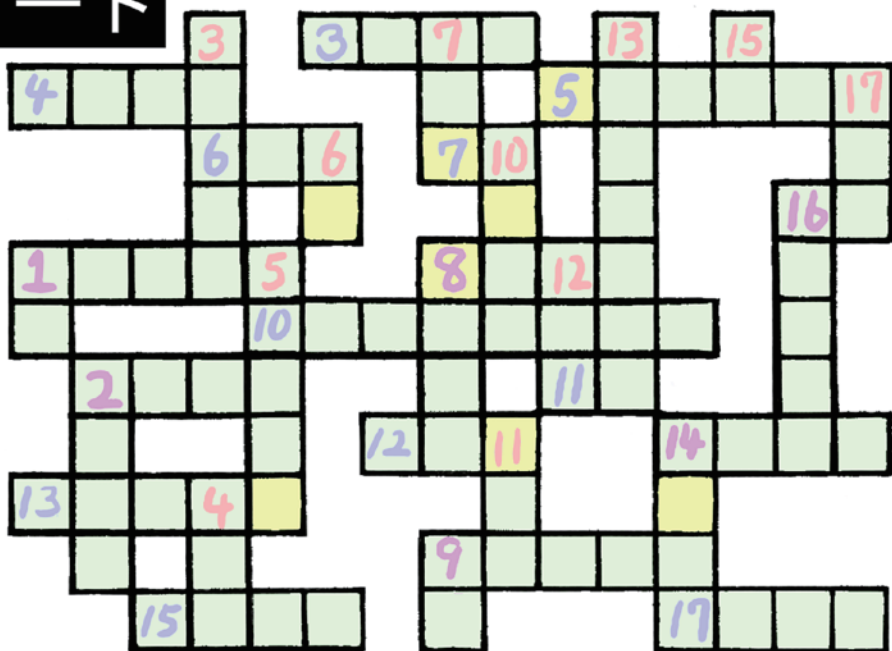
さて、次号のテーマは、中秋の名月(今年は10月3日だそう)も間近ということで「月(見)」でございます。月といえば、永遠亭のキャラ達とのお話など思い浮かびますね。秋の夜長は、虫の合唱も似合いますし、雰囲気溢れる作品の投稿をお待ちしています。

なんと、いつの間にやら、次号で創刊から半年ですよ！ 一年の半分の月をリグルの雑誌で埋めることができると思うとわくわくしますね。界隈の片隅でちゃっかりこっそりと続けさせて頂いてる当企画ですが、油断大敵、一匹見たら○○匹、ということで今後も虫々大繁殖を目指していきたいと思います。では、また来月。

2009 / 8 / 22　小崎

次号10月号は9月22日（火）発行予定！

※次号投稿締切は9月15日(火)です。皆様からの熱い投稿をお待ちしています。

・要は普通のクロスワードです。嘘です。虫関係が多いです。
・赤の番号にはタテの単語、青の番号にはヨコの単語が入ります。
・紫の番号にはタテ、ヨコの単語が両方入ります。つまりは頭文字を共有するということです。
・地が黄色いマスの文字を書き出して並べるとリグルの密かな野望が……？

タテの蟲

1. ぶんぶんぶん♪〇〇が飛ぶ♪
2. 特定の種の集団生息地。間違っても落としてはいけない。
3. 虫の子供時代。かりんとうっぽいのが多い。
4. 虫の生活はいつだって〇〇〇と隣り合わせなのさ。
5. 冬を越す準備をしなかった吟遊詩人。アリはケチだ。
6. 腐肉はご飯です。母さんは速いらしいです。
7. リグルが打ち出した〇〇〇強兵政策。でもまず国が無い。
8. カブトの近くには大抵いる。ブイブイと呼ばれることも。
9. 海辺に行くと〇〇ムシがカサカサ。Gに少し似てる。
10. ぶっちゃけ防御力が高いだけのナメクジだよね。
11. アイムノッタ〇〇〇！アイマガール！
12. 玄爺ヘッド。エロいって言う人がエロいんです。
13. 騒霊三姉妹の苗字。虹川。最近まで虹棒だと思ってた。
14. 貴方のお家は私のご飯。実はアリよりGに近い。
15. これで飛びます、でも幻想郷では無くても飛べる。
16. 水を引いたり畑を耕したり。人間は忙しいなぁ。
17. 頭はちゃんと洗わないと〇〇〇が住み着くよ。

ヨコの蟲

1. ホタルの尻。ホタルイカには 1000 個ぐらいある。
2. 秋の夜はコロコロ五月蠅い。バッタによく似てる。
3. 木の枝と見分けがつきません。紛らわしい。
4. 一日の寿命を生きる儚い虫。
5. ヨコの 8 の尻を水面へつければ彼に会えるかも。
6. 乱暴に捕まえると羽が破れる代表格。
7. この、蜂蜜泥棒！
8. 中国拳法にも取り入れられた虫。卵はトラウマ。
9. 椛さんも予防接種をしています。蚊には注意。
10. 我らが蟲姫さま。きっとまた出番がある筈……！
11. 竹林の忍者が使うスペカ。虚人。
12. 〇〇〇の眼鏡はみずいろめがね♪
13. 魚の刺身にはこいつがいるかもしれない。
14. カブトとクワガタが出会えば〇〇〇〇するしか。
15. 〇〇〇〇は儚き人間の為に。緑髪仲間。
16. 体長の 200 倍のジャンプ力。ある意味吸血鬼？
17. ヨコの 6 が飛ぶとその辺に撒き散らされる。

月刊NIGHTBUG　2009年9月号

Touhou Project
Wriggle Nightbug
Fan book
Not for sale

MAL
社　蛍夜
Jade
夏樹 真
貴キ
戌亥
涼音 奏
第６珈琲
草葉
キッカ
熾天使
くろと
亜人
蛍光流動
ADDA
ニトリフ
草加あおい
てつ
モ誠幹
豆板醤
mimidori
緑
羅外
東
秋水
uchu-jin
怒羅悪
ひどぅん
HOUSE
斑
小崎